

# 読書メモ 2017年8月号

加藤陽子著

## 『戦争まで一歴史を決めた交渉と日本の失敗』 (朝日出版社) ほか

やなぎさわかつひろ  
柳沢克央 編

(信州・上田仮説サークル)

2017年8月26日(土), 8月例会用レポート

### ◇はじめに

先月号の「読書メモ」と同様、サークルで発表することを目的とすると、読書がはかどるので、今回もこのメモを作成しました。自身のため、記録を残すことが第一目的です。みなさま、よろしく(適当に)おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり、引用あり、要約あり、感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。(私物)と書き添えてあるもの以外はすべて篠ノ井高校図書室蔵書。

私物の「積ん読」本が増え「読書予定リスト」は以前にも増して充実しています。この夏休みに出来る限り「消化吸收」を進めていく予定です。

### ◇読書記録または読書メモ(順不同)

#### ◎高橋順子著『夫・車谷長吉』(文藝春秋・2017年)

新聞の書評を読んで興味を惹かれ、篠ノ井高校図書館にリクエストして購入してもらった。私小説家、くるまたにちようきつ車谷長吉氏(1945-2015)の妻で詩人、高橋順子さんによる「伝記的記録」＝「回想録」。文藝の薫り高く、なかなか読み応えがある本。ちょっと変わった大人同士の恋愛と結婚生活について、赤裸々に綴られている。気になった部分を断片的

に引用する。

○さて、いまはたて続けに二つも賞をいただきまして、この恐ろしい出来事に、心の芯が疲れ切ったような気持ちでおりましたところ、高橋さんからお手紙をいただき、私の言葉が順子さんのお心に届いたことに、深い驚きを感じております。こなたな愚か者の男に、思いを寄せて下さるなど、こればかりはまぼろしにも思い描くことが出来ないことでした。もし、こなたな男でよければ、どうかこの世のみちづれにして下され。お願いいたします。私はいま、このように記し了えて、<sup>ふる</sup>慄えております。(57 ペ)

○十一月十五日、大安、区役所に行って入籍した。これから何年いっしょに暮らせるかわからないが、私は長吉を見届けるつもりだった。八年間、料理場で働いたという下積みの経験があるから、この人は浮き沈みの多い作家生活を全うできるだろう。団子坂下の「千駄木倶楽部」で私はコーヒー、長吉は紅茶を飲み、それから会社に向かった。(78 ペ)

○こういうモデル問題で人を傷つけ、恨みを買ひ、自分もまた深く傷を負う私小説作家の宿命を、私はまだ向こう岸のもののように感じていた。「作家の妻も同罪よ」と新藤さんは早くから言っていたが、私は作家の妻である以前に詩を書く者であって、私もまた一匹きの虎である、とは大見得を切れないが、虎猫くらいの気持ちはある。私は長吉に喰わせてもらっていたわけではなく、私も生活費を負担していたのだから。しかし罪人をかくまった罪は生涯負わなければならない。(98 ペ)

○長吉の怒りがたぎってきた。このころ丑の刻参りの小説を思いついたのかもしれない。言葉の力、というよりも言霊を長吉は信じていた。古代的な魂の持ち主だった。怒れる魂が妄想したこの小説は、のちに直木賞受賞第一作として書かれることになる。

このころ長吉と二人、どうやって食べていくかを思案していた。社員寮や保養所の管理人夫婦を求む、などという新聞広告を見ていた。おでん屋をやってもいいが、夏はどうする、とか、私が一人でやっている書肆といを二人でやる可能性なども考えた。「食堂をやるとしたら、文学は捨てねばならない。いい加減な気持ちではできない。あなたに文学を捨てて、女将をやることができるだろうか」と長吉が言う、「ともかく流山に行ってみよう。そこに住めるかどうか見に行こう。きれいなところだそう。家賃は十万ほどだろう。ただ何もかも消極的になりはしないか。いままでわたしたちはギリギリスでやって来たが、アリにならねばならないのではないか」。長吉がもっとも夫らしかったと

きである。(113 ペ)

○夕飯の後、いつもは長吉が食器を洗ってくれるのだが、水を流しているとまたおかしくなると思い、私が洗った。

「このままではあなたを殺すか、自殺するかだ」とたびたび言うので、怖くなり、三本とも包丁を隠す。私もセーターを手で洗っていると、ドキドキしていつまでも洗い終えず、狂いそうになる。水を使うのがいけないようだ。

それでも、治るかもしれない、という希望を私は持っていた。いま書いている長編小説を完成させてほしかった。書かせてあげたかった。

「大学病院の精神科に行きましょう、治るから」と私が言っても、「小説を完成させるまで行かない」と言う。そしてついに「順子ちゃん、ぼく狂ってしまった」と自分でも異常をきたしたことを認める。

恐ろしかった。狂うということは、何もかも分からなくなることではない。正常に、しかも冷静に働く判断力もあって、信頼を寄せている前田富士男さんに電話するように言われる。前田さんの友人の精神科医・北里さんを紹介してもらおう。前田さんは、作家と詩人は狂気を養うところがちがうので、いっしょにいられるのだろう、とおっしゃる。

(125 ペ)

○二十四日、布団を干して、夕方、取り入れようとしたところ、「動かないで」と言われてしまった。そこへ雨が降りだし、夜じゅう降って、ぐしょぐしょになる。修羅の家になった。昨日から私に「ノートを持ってきて」と言って、数時間口述させる。自分の病状のことや、これから書く小説など。小説は私の書くペースに合わせてゆっくり語ったが、一字の言い間違いや変更もなく、いきなり完成原稿だった。それまで脳裏に何度も反芻してきたことを思わせたが、精神の異常な冴えというか集中力だった。語りということが、この人の小説の重要な要素であったことがいまは分かる。私は私のすべての仕事を放擲して、ノートをとった。二人ともこの作業で救われるところがあった、といまは考えることができる。(133 ペ)

○二次会の喫茶室に、新聞社の人から私に「お忘れ物です」と言って、紙袋を届けてくれた。賞金の小切手と正賞の硯が入っていた。長吉に大物だ、と呆れられた。

三月になって、霊能者の叔母から「車谷の病気は一生治らない。順子は一生苦勞する。お守りのペンダントを上げよう」と言われたが、もらってこなかった。ふだんは事実関係だけを記している日記だが、この日私は「苦勞も厄も引き受けようと思う」と書いて

いる。このころは希望も元気もあったのだ。一方長吉は「もう生きていなくてもいい気がする。終わってしまったような感じがする」とつぶやいていた。私も受賞以来気が抜けたような感じだった。(149 ペ)

○よ氏は長吉に聞いたところによると、直木賞受賞決定の電話をしたところ、「これで面白いところは終わってしまいましたね」と言ったそう。傍観者だったのである。長吉は「友達とは血を流すものだ」と言う。「血を流してくれたのは、あなただけだ」と、私を盟友扱いしてくれた。

長吉は「いままで有り難うございました」と彼に葉書を出したそうである。それから毎晩よ氏の話である。「彼は頭がいいが、頭が弱い。心も弱い。啄木の歌を思い出すよ。彼の心境だ。『友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻と親しむ』。しかし彼には妻がないのだ」と言うので、私が混ぜ返す。「友がみなわれより去ってゆける日よ酒を買ひ来て妻と親しむ」。お祝いのお酒は一年分くらいはありそうだったが、以来長吉の酒量が上がった。(163 ペ)

○小日向の借地条件付きの家二七〇〇万円を見に行ったところ、坪庭があつて洒落た造りだったが、地代が月三万円。ビワの木があつて、あの木が気に入らないから止めようと言う。「千駄木で死にたい」とつぶやいた。長吉は死に場所を探していたのだ。(164 ペ)

○山と積まれた段ボール箱を開いてゆくと、大きな木目込み人形が出てきた。はてな、少女時代に叔父に日本人形をもらったことがあるが、どうしてここに、と首を傾げていたところ、長吉が「あ、それ、ぼくの」と言って抱きかかえて二階に上がってしまった。啞然とした。(169 ペ)

○五月末ごろ、「このごろ人を殺したくてしようがない。母親とあなただけは殺さないが、いつ逆になるかもしれない」と物騒なことを言ったことがあつた。作品に昇華させることができずに生煮えだと恐ろしい。私は聞こえないふりをしていた。兄弟殺しを題材にした小説を書きたいと言っていたが、何か不都合なことがあつたのか、実現しなかつた。(171 ペ)

○私は真っ赤に色づいた柿の葉を集め、それに武蔵丸（カブトムシの名前）をのせて、元の箆筒の上に安置した。長吉は武蔵丸ちゃんのことを書く、と猛然と短編小説に取り

かかった。一晩で「武蔵丸」三十数枚を書き上げ、新潮社の前田さんに連絡。前田さんはすぐに来宅され、一読後、筆筒の上の武蔵丸の亡骸に手を合わせていった。

この小説は「新潮」二〇〇〇年二月号に掲載され、翌年度の川端康成文学賞を受賞した。長吉の小説の中で、私がいちばん好きな小説である。(175 ペ)

○私が「これからは穏やかな生活だといいいですね」とつぶやいたら、「いやだ、疾風怒濤でなくては。おれは疾風怒濤を生きる」と言うのである。若いころ母親にそう言ったら、「なんやそれ」と呆れられたという。(197 ペ)

○二〇一二年の正月は長吉と谷中七福神めぐりをした。富士見坂から富士山が見えた。来年はビルが建って、見えなくなるそう。文藝春秋と平凡社からの原稿依頼に「全集が出たし、もう書くことがない」と言って断る。炬燵に当たりっぱなしで、本も読まず、居眠りもせず、原稿も書かず。「赤目を書き上げたときから精子が出なくなった。ということはあれがおれの子どもだったのかな」と突然ひとりごつ。

二月二十四日、久しぶりに読売文学賞のパーティーに出たとき、知人たちに長吉の様子を聞かれて、「意欲がなくなりました」と言うと、「新潮」の元編集長だった坂本忠雄さんは「そういうときは沈黙することだ」、朝日新聞社の大上朝美さんは「歩くように書くこと」。新藤涼子さんは「明るく朗らかにしていること」と、三者三様のアドバイスをくださった。(249 ペ)

○長吉は二階の書斎で原稿を書き上げると、それを両手にもって階段を降りてきた。「順子さん、原稿読んでください」とうれしそうな声をだして私の書斎をのぞく。私は何をしても手をやすめて、立ち上がる。食卓に新聞紙を敷き、その上にワープロのインキの匂いのする原稿を載せて、読ませてもらう。

私は評論家ではないので、なにほどのことも言えない。「すごいね」とか「いいねえ」とか、途中で笑ったり、平仮名の抜けている箇所を注意したり、「女の方はこんなふうに言わないよ」とか、単純なものである。それでも長吉は儀式のようにまず私に読ませた。

結婚当初は私に散文の指導をしてやろうという気持ちがあったらしく、一つの作品には二枚のカードが必要だ、とかいろいろ教えてくれた。自分の小説に「二枚目のカードが見つからない」と幾日も長吉がつぶやいていたのを覚えている。

私も詩集の書評以外はすべて長吉に読んでもらった。「いい？」と訊ねて「いい」と言ってもらえると安心した。晩年は「よろしい」と言うようになった。体調が悪いときでも、私が「いつでもいいから読んでね」と頼んだときでも、いつもすぐに読んでくれた。

これは脳梗塞を発症してからも変わらなかった。

作品を見せあうことは別に約束したことはない。でもそれは私たちのいちばん大切な時間になった。原稿が汚れないように新聞紙を敷くことも、二十年来変わらなかった。相手が読んでいる間中、かしこまって側にいるのだった。緊張して、うれしく、怖いような生の時間だった。いまは至福の時間だったといえる。(273 ペ)

\*

結婚に至るまではとてもロマンティックで詩的で美しい。結婚してからは、互いの剥き出しの人格の衝突が激しく、読んでいて苦しくなってくる。だが、自分のことでないから安心して読める。この点、とても魅力が深い。

車谷長吉氏の晩年の「枯れ方」は、噺家・立川談志の「それ」に似ていると思った。

この本には何か大きな賞が与えられるという予感がする。私小説かと詩人の組み合わせって、魅力的だけれど、当人たちはとても疲れただろうなあ。でも、こういう作品が残されるからこれもまた、成功なのだろう。

どこか謎めいていて、奥行きがあって、切ない、とても素晴らしい本。

### ◎ピートたけし著『日本人改造論』(角川新書・2014 年)

篠竹祭の古本市で発見し購入。読みやすい。毒舌全開。テープ起こしから編集して作った本だと思われる。

### ◎21 世紀研究会編『常識の世界地図』(文春新書・2001 年)

篠竹祭の古本市で発見し購入。雑学的な本。電車で移動するときや床屋で順番を待つときに読むような本。編集者は「21 世紀研究会」。著者名が分からないのはマイナスポイント。ザッと流し読みしたが、面白い部分は結構あった。気になった部分を引用して紹介する。

○日本は、「職業に貴賤はない」という考え方が、比較的すんなりと受け入れられているように思える。もちろん医者や弁護士などのエリートと、いわゆる「3K」の労働者との隔たりは歴然だとしても、地味な職人技が尊敬を集めるようなところがある。また、儲からなくても町工場でコツコツ働くタイプが好意的に語られる。だが韓国では、一般に、ものをつくる職人は尊敬を受けない。

日本の「匠」やドイツの「マイスター」のように熟練した職人が高い評価を与えられる社会は意外に少ないのだ。(187 ペ)

○いつだったか、あるアメリカの写真雑誌に、ベドウィンの首長たちが左手で食事をしている写真が掲載されたことがあった。写真を裏焼きにしたことに気づかないまま出版してしまったために、右手で食べているはずが左手で食べているようになってしまったのだ。この雑誌が発売されるや、敬虔なイスラーム教徒たちからすさまじい抗議が殺到したという。

このように、左右にこだわるのは、イスラームがヒンドゥーと同じように、右手を清浄、左手を不浄とするからだ。イスラーム教徒は、大便をしたとき、左手で水をすくってお尻を洗う。左手はこのときに使う手だから、他人にその手を差し出すのは失礼だということなのだ。

しかし、だからといって、左手を使わないで一生を終える人などいるはずはない。

それは、イスラーム教徒を見ると、いまだに、「何人の奥さんがいるのか」と興味本位で尋ねるのと同じような疑問で、「左手を使わない」などということは、実際には、ありえないことなのだ。

また、イスラーム教徒は、常に右を重視し、何をするにも右からはじめる、とも言われる。右手で扉を開け、家に入るときは右足から、などなど。しかし、これもまた日本人が、いまだに丁髷、着物で、木と草でつくった家に住んでいる、というのと同じレベルの誤解だろう。

もちろん、預言者ムハンマドの教えに忠実に従うことが何よりも大事だという人は確かにいる。そうした人にとっては、冒頭にあげた写真の裏焼き事故でさえ、イスラームへの「冒瀆」と感じるかもしれない。しかし、イスラームの教えといえども、現代の人々の生活に定着しているものと、そうでないものがある。イスラームの人たちはその基本を守りつつ、臨機応変に生きていると思った方がよさそうだ。(195 ペ)

○日本人も欧米人も、アラビア語はほとんど読めない。そのため、コーランの文字が書かれたTシャツなどを非イスラーム圏の店でつい買ってしまうことがある。

しかしコーランは、イスラーム教徒にとっては神の言葉そのものなのだ。その神聖な言葉を適当に使ってデザインしたシャツなどを着てイスラームの国を歩いたら、無事に帰国することができるだろうか。

土産物ではないが、こうしたことで世界的な問題になったのは、スポーツ用品メーカーのナイキだった。1997年の夏モデルとして発表になった運動靴のロゴが、アラビア文字の「アッラー（神）」に酷似していたのだ。イスラーム諸国では、われらが神アッラーを踏みつけるとは何たる冒瀆かと抗議が噴出し、ボイコット運動へと発展したのである。驚いたナイキは、すぐにイスラーム者会に謝罪し、商品の回収はもちろんのこと、米国

内のイスラーム系の小学校に運動場を寄付して、事態を收拾した。

日本人は、自分は無宗教だと平気で口にするが、それは世界の常識とはまったく違うのだ。

とくに一神教を信じる人々に対して、自分は無宗教だなどと言ったら、彼らの神を否定しているともとられかねない。(239 ペ)

\*

◎<sup>しげただ</sup>岸井成格著『議員の品格』(マイナビ新書・2016 年)

篠竹祭の古本市で発見し購入。TBS の日曜朝の番組「サンデー・モーニング」のコメンテーターによる本。分かりやすい。特に書き写すほど気になる部分はない。

◎エドワード・スノーデン他著『スノーデン 日本への警告』(集英社新書・2017 年)

朝日新聞の書評コーナーで紹介されていた本。篠ノ井高校の図書館にリクエストして購入してもらった。タイムリーな本。「賞味期限」はさほど長くないだろう。7 月号で紹介した小笠原みのり編『スノーデン、監視社会の恐怖を語る』(毎日新聞出版・2016 年)をすでに読んであったので、それ以上に新鮮な話題はほとんどなかった。特に気になった部分を紹介する。

○刊行にあたって エドワード・スノーデンのメッセージ

私は社会人としてのほとんどの期間をアメリカ政府のために働いてきました。2013 年 5 月からは社会のために働いています。犯罪と縁もゆかりもない世界中の市民のプライベートな活動を民主的な政府が監視している証拠をジャーナリストに提供した際には、人々が関心を寄せてくれないのではないかと不安でした。自分が間違っていたことをこれほど喜んだことはありません。

2013 年以降、大規模監視と自由な社会との関係について世界で激しく議論されています。アメリカを含むいくつかの国では、重要な法律の改革が行われました。他方、政府が監視の法的権限を拡大しようとしている国もあります。私は特定の政策の実現を求めてリークに踏み切ったわけではありません。民主主義社会で生きる市民が、十分な情報に基づいて意思決定を行えるようにすることが目的でした。多くの重要な意思決定が、情報公開や市民との協議を経ずに閉ざされたドアの向こう側で指導者たちによって行われているのであれば、たとえ彼らが選挙で選出されているとしても、その政府を真の意味で民主的な政府と呼ぶことはできません。

本書に収められているシンポジウムでお話しした際は、ドナルド・トランプ氏が実際

に大統領に選ばれる可能性などほとんどないように思えました。シンポジウムでは、すべての人が大規模な監視に関心を寄せるべき理由の好例として、トランプ氏のような独裁者が選出される可能性を引き合いに出したのです。想像もできなかった事態が現実となった今、アメリカを含む民主的な国家の市民が、民主主義とは、引き継がれてきたものの上にあぐらをかいていけばよいのではないということに気付くことを願っています。それぞれの世代が常に民主主義を求めて闘わなければならないのです。「トランプ大統領」は、私たちを自らの理念に改めて積極的にかかわらせるための”目覚まし時計”となるかもしれません。

理念のために立ち上がることは、ときにリスクを伴います。私と同じこと、すなわち不正を暴くために自分の人生を完全に変えることを、誰もができるわけではありません。しかし私たちはみな人生のどこかで、易きに流れる道と正しい道のいずれかを選ばなければならない場合に出会います。私たちにはみな、小さなリスクを取ることで社会をよりよくすることができる機会があるはずです。私たちにはみな、安全を求めてではなく、正しいがゆえに行動する機会があるはずです。

本書の出版をうれしく思います。読者の皆様が自由な社会における市民としての義務に想いを馳せてくれることを期待しています。日本は私にとって特別な国です。政治に関心を抱くようになったとても重要な時期を日本で過ごしたからです。また日本の皆さんと今回のような対話ができることを楽しみにしています。

**エドワード・スノーデン**

2017年2月 ロシア・モスクワにて

### ○日本の報道は危機的状況

**スノーデン** 今、日本のプレスは脅威にさらされています。その態様はピストルを突き付けられたり、ドアを蹴られたり、ハードドライブを壊されたりという形の恐怖ではありません。日本における恐怖は、静かなる圧力、企業による圧力、インセンティブによる圧力、あるいは取材源へのアクセスの圧力です。テレビ朝日、TBS、NHKといったような大きなメディアは、何年にもわたって視聴率の高い番組のニュースキャスターを務めた方を、政府の意に沿わない論調であるという理由で降板させました。

政府は自分たちの持つ地位と権力を理解しています。政府は放送法の再解釈を通じてプレッシャーをかけています。政府はあたかも公平性を装った警察のようにふるまいます。「この報道は公平ではないように思われますね。報道が公平ではないからといって具体的に政府として何かをするわけではありませんが、公平でない報道は報道規制に反する可能性がありますね」などとのめかすのです。

こうした類の脅迫は、メディア各社の上層部に明確に伝わっています。これは驚くことではありません。メディアの事情も理解はできますが、脅威に屈してはいけません。政府が嫌いなニュース会社やニュースキャスターを排除してはなりません。今求められていることは連帯です。

ニュース組織、TBS、NHK、テレビ朝日、その他のさまざまなテレビ・チャンネル、そしてジャーナリスト団体が一緒になって、自由な報道というものは政府の言いなりになって書くのではないこと、開かれた社会における報道の自由の目的は政府による情報の独占に対抗することにあることを訴え続ける必要があります。

とりわけ、日本社会や日本で暮らす人々の権利に大きな影響を及ぼす事項については、対抗していく必要があります。政府の動きを調査できなければ、企業の動きを調査できなければ、また調査の結果、判明した実態を人々に伝えることができなければ、ジャーナリストではなくなってしまう。ジャーナリストではなくただの速記者です。それは日本の市民社会にとって非常に大きな損失であり、ひいては日本にとっても大きな損失だと思えます。(54 ペ)

## ○自由を享受できる社会は市民が主役になって初めて実現される

——終わりの時間が近づいてきました。最後にニコニコ動画のユーザーからの質問をメッセージとともに読み上げます。多くの方が共感するメッセージだと思えます。「あなたがやったことは勇敢であって尊敬しています。多くの日本人があなたの活動をサポートしていることを知ってほしいと思えます」。そのうえで質問です。「日本の人々にメッセージはありますか。日本人として、あなたをサポートするために何ができるでしょうか。**スノーデン** 第一に関心を抱いて下さい。シンプルに聞こえるかもしれませんが。しかしプライバシーとは何かを隠すことではありません。守ることです。開かれた社会の自由を守ることです。立ち上がり自分の権利を守らなければ、そして政府が適切に運営されるように努力しなければ、権力の腐敗が起こります。

市民が反対しているのに政府が意に介さずに法律を成立させるような社会では、政府は制御不能となります。あらゆることのコントロールが失われます。人々は政府と対等のパートナーではなくなります。全体主義にならない保証はありません。

私たちはみな、自分たちの子どもを自分たちが引き継いだ社会よりも自由でリベラルな素晴らしい社会に住ませたいと願っています。それを実現させる唯一の方法は、常に目を光らせ続けることです。常に民主主義にかかわり続ける必要があります。監視の問題のみならず、自分にとって重要なことについてもかかわり続けなければなりません。

ネガティブな面を見るだけでもいけません。もちろん政府が悪いことをした時には責

任を取らせなくてはなりません。非難するだけでなく、良いことを評価すること、そしてさらに重要なことは具体的にこういうことをやってほしいと訴えることです。前向きな社会のヴィジョンを持って下さい。

たとえば、電話をする時は常に、政府のデータベースに集められる内容を思い患う社会には住みたくないでしょう。私は自分がしたすべてのことが追跡され、監視される社会には住みたくありません。たとえば、三年前の三月四日にどこにいたか、私自身は覚えていませんがフェイスブックや携帯電話会社は知っているわけです。

突き詰めれば、これは選択の問題であり、同意の問題であり、そして参加の問題です。

人と話してください。価値観を共有してください。会話をしてください。議論をしてください。そして決して恐れなくてください。リスクを認識すること、それが現実にあると認識することは大事なことです。

手榴弾の上に身を投げ出しましょうなどと言っているわけではありません。誰もそんなことしたくありません。殉教者など必要ありません。

けれども行動を怖がらないで下さい。過ちを見つけたならば、すぐに行動に移して下さい。既定路線になる前に動いて下さい。政府の方針となることを待たないで下さい。物事を注意深く見て下さい。よく考えて下さい。受け身にならないで下さい。そして最後にこのことを忘れないで下さい。自由を享受できる社会は市民が主役になって初めて実現されるということ。

あなたは誰かをサポートする脇役ではなくて主役なのです。ありがとうございました。

(84 ペ)

\*

いわゆる「共謀罪」法案が施行された。スノーデン氏の提起した問題は大きい。これからの日本の言論の自由はどうなるのか。戦前の「治安維持法」のような運用をされたらどうなるのか。人ごとではないが、具体的にどのような行動したらよいかは、良く分からない。さらにこの問題に関しても、勉強を深める必要がある。

### ◎立川談志著『努力とは馬鹿に<sup>あた</sup>恵えた夢である』(新潮社・2014年)(私物)

立川談志(1936-2011)の晩年のエッセイ集。巻末にインタビューもある。晩年のエピソードが自らの手で綴られている。圧巻は2007年暮れに口演した「芝浜」という噺に関する、次に引用する文章。

\*

“暮れ”の独演会の「芝浜」のことにチョイと触れる。照れも遠慮もあるものか、すさまじい芸であった。

神が（芸術の神か）立川談志を通して語った如くに思えた。最後はもう談志は高座に居なくなった。茫然自失、終わっても観客は動けず、演者も同様立てず、幕を閉めたが、又開けた、また閉めて、又開けた。その間、演者は何も云えなかった。たった一言“一期一会、いい夜を有り難う”としか云えなかった。

聞き手の中のプロ、我が落語立川流顧問の吉川潮も同様であった。楽屋に何の偶然か来ていた談春、志らくも同じである。

終わって感想、感謝の弁さえなかった。打ち上げはいつもの銀座の「美弥」という小さな酒場で、此処でも「芝浜」の話は出なかった。娘がやっているBARには小生のファンも「芝浜」を聴き、その店に参じたがその話は出なかった、という娘のハナシで、三日、四日、五日たって、初めてその場で「芝浜」の感想を思い思い語り合っていたそうなの。

こういう文を書くことに人一倍照れるこの私、家元も己に負け、神の芸に謝し、この文となった。書いて置きたかったのである。

\*

もう出来ない、二度と出来まい。この為に立川談志を七十数年も生かして置いてくれたのか。“ハイ、出来上がり”と神は云っているのか。ならば愚痴愚痴、グチのこの二、三年の総仕上げであったのか。なら立川談志生きていてよかった。実は何度“死にたい”と思ったことよ…。

あの「芝浜」は人生、落語家の総仕上げであったのか。だとすると、あとは抜け殻、“談志の抜け殻でござい”と「よかちよろ」のフレーズとなるのかも…。

けど、“続ける”という他に方法を知らない。どうすりゃいいのさ思案橋。

いや、「談志ひとり会」という名の抜け殻か、次へのつなぎか、時間の処理か。一応家元“落語とは何か”ということに対して結論もある。

加えてこの二、三年の体力の衰え、己の自尊心が、それをどこまで許せるのか。妥協して、時間を過ごすことでいいじゃないかというお客の慈悲はあってもそれもなア…。

けど、演るなら立川談志、その空間を「老い」という言い訳を通して過ごせるものか。まだ全くダメではないという気もある。生来の強気か、ヤケクソか。でも、でも、あの「芝浜」が…よそう、もう散々云った、いや書いた。並みの談志、いや噺家に近い部分から又始めるか、狂いそうな日々なのである。

“助けて呉れえー”といったとて、何処に救いがあるものか。いっそヤケクソにでもなるか。そこそこ演れる噺もあるかも知れない。「松曳き」に「堀の内」、もう「五人廻し」、「居残り」は出来まい。ならいっそ出来る処まで演るか。“へい、居残りの「中」でございます……”とネ。(190 ペ)

\*

巻末にある立川談志の長男、松岡慎太郎氏の「あとがきにかえて」に、上に紹介した内容に関連して次のように書かれている。

\*

…「一番強く記憶に残っている談志師匠の姿は？」と質問をよく受けるのですが、右のような事情で思い出すまでもなく、「特にはないです」と答えています。強いて挙げると、例の 07 年の「芝浜」の時、私はホールのロビーであれこれ用事をしていて、モニターの音声だけが聞こえていました。新しい演出の「芝浜」であることは事前に知っていましたが、ハッキリ内容までは聞き取れません。けれど終わったときの拍手がいつもと違いました。言葉で説明するのは難しいですが、心から感動したという拍手なのです。「あ、凄い高座を演った」と直感で分かりました。場内から出てきたお客さんたちは顔を紅潮させ、興奮していて、泣いている方もいらっしやった。ところが楽屋へ行くと、談志は昂揚もしておらず笑顔でもなく、あまり喋ろうともしませんでした。出来には満足しているはずなのに、むしろ「これ以上のものはもうできないだろうな、これで俺も一丁上がりかな、芸の神もこんな処か……」と少し困惑したような姿だったことを、今でも時折思い出します。(談) (254 ペ)

\*

思索する落語家(だった)、立川談志について、また理解を深めることができ、有意義だった。

**◎<sup>かずお</sup>広瀬和生著『談志の十八番一必聴！名演・名盤ガイド』(光文社新書・2013年)(私物)**

立川談志の十八番のCD・DVD(同演目・異演盤・さらに他の噺家の盤も紹介)を詳しく分析、比較、紹介したマニア向けの本。クラシックの名盤紹介本に構成が類似している。文章が引き締まっていて明快。熱がこもっており、素晴らしい。主に電車の中で読んだが、読んでいる間、時間の経つのがあつと言う間だった。でも、幸い「乗り越し」はしなかった。

聴いてないのに、聴いたような気になれる。この点、『間違いだらけのクルマ選び』(草思社)に似ている。落語の細かい言い回しなども詳しく比較して書かれているので、「ネタバレ」になってしまうおそれもある。読むときは注意が必要。

立川談志の遺した落語ソフトは極めて充実していることが分かる。資金的にちょっと手が出せないのが、この本を読んで我慢することにする。

◎加藤陽子著『戦争まで一歴史を決めた交渉と日本の失敗』(朝日出版社・2016年)

この本は普通の新書の3倍くらいの情報量が入っていると思う。著者は東京大学文学部教授。1960年生まれ。中高生を集めて特別講義をした記録を起こして作った本。読みやすい。朝日出版社は朝日新聞社とは全く関係ない別会社。朝日新聞社と資本関係があるのは朝日新聞出版。気になった部分を引用。

○私が講義を行った中高生というのは、いわば理念型であって(生身の生徒さんに向かって理念型というのは、まことに失礼な話です)、この社会に生き、日々の選択を切実に促される立場にある人なら、中学生であろうと高校生であろうと子育て中の方であろうと社会人であろうと退職した方であろうと、すべて私が本を届けたい対象の方々に入ります。(「はじめに」4ペ)

○日本と世界の双方で、国家と国民との関係の軸が、過去にない規模で大きく揺れ動いているのではないかと感じています。このように見てくれば、人生の岐路に立たされた人々に対し、さあ選択せよと背中を押すだけではダメだということが見えてくるのではないのでしょうか。彼らが選択から顔を背け、沈黙するのは、ある意味で無理からぬことなのです。

そうではなく、選択の入り口の地点で、ゲームのルールが不公正であったり、レフリーが不公平であったりする現状を目にしたとき、国家との社会契約が途絶えた絶望する道をとるのではなく、ゲームのルールを公正なものに、レフリーを公平な人に代えていく、その方法や方略を過去の歴史から知ること、それが今、最も大切なことだと私は考えています。(「はじめに」6ペ)

○昨年、2015年は、太平洋戦争が日本の敗北に終わってから70年目にあたっており、日本政府は、同年8月14日、閣議決定を経た文書として、「内閣総理大臣談話」を発表しました。そこに示された、幕末維新期から現在にいたる日本の歩みへの歴史的評価と、世界の繁栄を牽引する国家としての決意表明については、内外から多くの論評がなされ、本書の1章でも詳しく論じておきました。ただ、一人の歴史家として私がここで強調しておきたいことは、この談話が、国家によって書かれた「歴史」の一つにほかならないということです。(「はじめに」7ペ)

○2章から4章までにかえての三つの章は、本書の中核部分に当たります。選択という行為が真空状態でなされるのではなく、さまざまな制度の制約を受け、国際環境や国内

政治情勢の影響下でなされることは、先にも述べました。そうであれば、国や個人が選択を求められる場合に重要なのは、問題の本質が正しいかたちで選択肢に反映されているのか、という点です。当時の為政者やジャーナリズムが誘導した見せかけの選択肢ではなく、世界が日本に示した本当の選択肢のかたちと内容を明らかにしつつ、日本側が対置した選択肢のかたちと内容についても正確に再現しながら、世界と日本が切り結ぶ瞬間を捉えようと努めました。

問題の本質が正しいかたちで選択肢に反映されているか。この点に思いが至れば、恐怖や好悪という人間の根源的な感情に訴えかけられたり、「もし、こうすれば、確実に〜できる」といった偽の確実性に訴えかけられても、冷静な判断が下せそうです。「歴史を選ぶ」際の作法を、過去の三つの歴史的事例から、みなさんと考えたかった理由は、ここにあります。

世界が日本に、「どちらを選ぶのか」と真剣に問いかけてきた交渉事は、三度ありました。2章では1931（昭和6）年9月、関東軍の謀略によって引き起こされた満州事変に対し、国際連盟によって派遣された調査団が作成したリットン報告書をめぐっての交渉と日本の選択を扱いました。リットン報告書が展開していた論理と提示していた選択肢は、じつのところどのようなものであったのか、それをくわしく論じました。

当時の日本の新聞などは、リットン報告書が出た瞬間、「支那側狂喜」などの扇動的な見出しを掲げ、報告書が中国の主張を全面的に支持していたかのような報道を行いました。しかし、本文で述べたように、中国側の本当の反応は、リットン報告書を日本側の既成事実配慮しすぎだと厳しく批判したものでしたし、報告書の実態も見出しとは違っていました。2章を読んでいただければ、報告書が、満州（中国東北部）に対する日本側の歴史的経緯に配慮しておらず、中国側に一方的に肩入れしたものだのとイメージは一変するはずです。

3章では、1940年9月、ヨーロッパでの戦争と太平洋での日米対立を結びつけることになった日独伊三国軍事同盟について、イギリスやアメリカなどの動向も視野に入れながら、ドイツとの外交交渉や国内での合意形成の過程に焦点を当てました。この時期の日本は、1937年7月からの日中戦争を3年戦っていましたが、39年9月からヨーロッパで開始された第二次世界大戦には中立の立場をとっていました。しかし、40年春から初夏にかけてのドイツの電撃戦によって、オランダやフランスなどが敗退した結果、ドイツと戦っている欧州の国は、実質的にイギリスだけとなりました。

ナチス＝ドイツは、第一次世界大戦後に構築されたヴェルサイユ体制の打破を呼号し、国民の圧倒的支持を得て政権につきました。欧州で電撃戦の勝利を挙げた、そのドイツが、それでは次に、東南アジアや太平洋へ向け、いかなる政策をとってくるのか。この

点については、当然、日本も注視していたはずですが。3章では、内外の最新の研究成果を参照しつつ、日独伊三国軍事同盟条約交渉の裏面にあった日本側の意外な真意や、中国側の意外な反応などを明らかにしました。この章をお読みいただければ、日本の軍部がドイツの戦勝に幻惑され、「バスに乗り遅れるな」とばかりに同盟を締結したとのイメージも変わるはずですが。

4章では、1941年4月から11月までの日本とアメリカの間で交渉がなされた日米交渉を取り上げました。交渉が頓挫した後に、同年12月8日、日本によってなされた真珠湾攻撃については、七十有余年が過ぎた今もなお、実証的な歴史研究のほか、さまざまな解釈をとる本が多数刊行されています。歴史的には支持されないが、依然として人気のある解釈として、次のようなものが挙げられるでしょうか—いわく、欧州においてドイツと戦ってきたイギリスに援助を与え、ドイツの中南米地域への影響力の浸透を阻止したいアメリカは、かねてから欧州の戦争に参戦したいと考えていた。しかし、戦争に消極的な国内世論に苦慮した大統領らは、日本による真珠湾攻撃の予兆を暗号解読によって知りながらも、敢えて日本が奇襲攻撃を行うのを待ち、国内世論を戦争へと燃え立たせたのだ、と。あるいは、石油の全面禁輸を行えば、日本は対米攻撃を決意するはずだから、敢えて強硬な経済制裁を行ったのだ、と—。

真珠湾攻撃に関する、このような解釈は、それに先立って半年余りなされた日米交渉の始まり、交渉内容、日米双方の思惑を史料から見ていくことで、だんだんと否定されていくはずですが。意外なことに、日本側もまたアメリカ側の暗号を高度に解読し、手の内を知りつつ交渉に臨んでいました。むしろ、日米双方にとって、交渉が不可欠とされた真の理由について、一つひとつの史料を吟味しながら考察していますので、楽しみに4章まで読み進めてください。戦争の惨禍の中で日本が選び取った道については、終章をご覧ください。

わずかな偶然が世界のありようを大きく変えてしまうかもしれない、そのような大きな時代の激変期に私たちは立ち会っています。戦争までの歴史を決めた三つの交渉、そこから今、学べることは決して少なくないはずですが。（「はじめに」10ペ）

## 第1章 国家が歴史を書くとき、歴史が生まれるとき

○技術力で負けた、というのは、太平洋戦争の負け方を戦後の日本人が総括するときにも用いられた認識の枠組みでした。ただ、技術力で負けたとすれば、先に書いたような、軍事と政治を切り分ける憲法論を美濃部などがしっかりと持っていたにもかかわらず、その理論を国内的な事情から自ら葬ってしまった（1935年の天皇機関説事件のことです。天皇は法人たる国家の最高機関だとする美濃部の憲法理論が帝国議会などで批判され、

著書が絶版にされた事件)、日本の国内政治の決定的な失敗に目が向かなくなるのではないのでしょうか。

談話が描く、維新から敗戦までの歴史像については、経済史研究からの批判が可能なのですが、それをお話しする前に、戦前期の歴史のあとに展開されている、第七段落以降の談話の内容を、まずはきちんとおさえておきましょう。10程の骨子からなっています。〔このあとの記述を柳沢が要約整理した。①広島・長崎・沖縄・中国・東南アジア・太平洋の島々など、戦場となった地域での犠牲者への哀悼の意を表明。②いかなる武力の威嚇や行使も「国際紛争を解決する手段としては」もう二度と用いないとの誓い。③インドネシア・フィリピンをはじめとする東南アジアの人々、台湾・韓国・中国など隣人であるアジアの人々へ日本が示してきた痛切な反省と心からのお詫びの気持ちの表明。④アジア太平洋地域からの引き揚げ、中国残留孤児の帰国などに尽力した関係国への謝意、米国・英国・オランダなどの元捕虜による日本訪問、慰霊への取り組みなどの紹介。⑤世界が日本に示した寛容のおかげで、日本が国際社会に復帰できたことに感謝し、歴史の教訓を胸に刻んで平和と繁栄の維持に努めるが、「私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を負わせては」ならない、との意思の表明。⑥武力を用いて現状を打破した過去に鑑み、核兵器の不拡散と究極の廃絶を目指す。⑦戦時下、「多くの女性たちの尊厳や名誉が深く傷つけられた過去」を胸に刻む。⑧経済のブロック化が紛争の芽を育てたことに鑑み、自由で公正な国際経済システムの発展に努める。⑨「国際秩序への挑戦者となってしまった過去を、この胸に刻み続ける。⑩これまで述べてきた理念に支えられた日本を、今後も国民とともに作りあげる決意の表明。〕

戦前の過誤の認識と将来への決意を上手くつなぎつつ、日本の目指す方向性が語られています。ただ、戦後の歩みとして、平和憲法を基軸にアジア・太平洋諸国との信頼関係を打ち立て、穏健な外交政策をとり、経済大国として歩んできた、その戦後七十年間の日本そのものについての描写が、意外にも少ないことに驚かされました。

戦後七十年の節目といっても、そこで語られるのは「戦後の七十年間」ではなく、あくまでも、「戦後七十年たった時点から振り返る戦前」だということが、あらためて、しみじみと胸に落ちます。「先の大戦」それ自体が、国の内外に持った巨大な意味を感じずにはられません。日本にとっての戦後とは、戦前を振り返りつつ考えるための時間そのものだったのではないかと、そのような感慨が浮かびます。(50 ペ)

○私は、最も多数の国民を対象とした歴史学を日本において作りあげたのは、吉野作造ではないかと考えています。吉野は、西欧、中国、日本という三つの地域の政治史を初めて本格的に講じた先生です。吉野は、近代とはなにかという「問い」からスタート

しました。近代の画期をなにに置くのか。いろいろな答えが考えられますが、共同体の解体、身分制の解体、市場を軸とした再生産構造、このあたりが揃ったとき、近代になった、と言えそうですね。

吉野先生が面白いのは、このような通常の近代の指標ではダメだ、国民の中に「近代的政治意識」が発生したときが近代だ、と大胆なことを言います。共同体や身分制を解体させる主体は、当時の為政者ということになりますから、その側面に注目して近代を描くと、どうしても分析の対象は、政府ということになってしまう。吉野先生は、国民をじっと観察して、その国民の頭に、近代的政治意識といったものが生まれるのはいつ頃で、なにを契機としていたのか、そこに興味を持ちました。彼は国民のこの意識を「政治を我が事とする態度」と言い換えています。(76 ペ)

○アダム・スミスといえば、私のような素人は、政府による市場の規制を撤廃し、競争を促進することによって、豊かで強い国をつくるべきだという主張を、『国富論』（1776年）で展開した人だと考えてきたわけですが、どうもそうではないらしい。先ほど引用した、アダム・スミスが最初に書いた本は『道徳感情論』とありますが、『国富論』を書く十七年も前にスミスが取り組んでいたものが、この本だったことを、頭の隅に置いておきましょう。(85 ペ)

○人間の幸福の増大、国民の利益の増大という観点から、アメリカ植民地を自ら分離して独立させるという方向性を選択したアダム・スミスは、やはり偉大だと思いました。国を二分するような、国民の将来の豊かさを決める、そのような煩悶の岐路に立ったとき、経済学という新しい学問が産声をあげたということですね。(88 ペ)

○ところで、皆さんの目の前にも、じつはアダム・スミスが煩悶していたのと同じような、大きな経済的な岐路がありますよね。…(中略)…ヨーロッパというのは、本来なんの問題もない優等生のはずだった。…(中略)…これまで、アメリカの一極支配が崩れても、中国やロシアの台頭があっても、EUが安定してくれさえすれば、という世界の思い込みがありました。これが難民の流入によって一挙に流動化したのが、昨今の世界の動きでしょう。グローバルな数と量で問題を解決するという方針が、通用しなくなるというのが、今なのです。

その中で、なにか人間が苦しみの中で考え抜き、ようやく発見した真理、それらを自国民に広めるだけでなく、他国民も共感を持って受容できるよう、言葉にして訴えかけ、形にして提示しうる知の力を持つ国や人々が、世界をリードしていくと思います。産業

革命を契機に国民の経済学がイギリスで生まれ、明治維新を契機に国民の歴史学が日本で生まれたように、また何かの学問がどこかで生まれてくるのではないのでしょうか。

みなさんが立っている世界は、今、まさに大きな分岐点、大きな曲がり角にあります。次回から、かつての日本が直面した、大きな分岐点を見ていきましょう。(90 ペ)

## 第2章 「選択」するとき、そこでなにが起きているのか

○本日お話しする満州事変とリットン報告書、三回目のテーマである日独伊三国同盟、四回目に取り上げる日米交渉、これら三つに共通しているのは、これらの案件が日本の近代史上において歴史の転換点だっただけでなく、日本と世界が火花を散らすように議論を戦わせ、日本が世界と対峙した問題だったということです。(94 ペ)

○このような恐れ of 感情、そして、愛する人が殺害されるのを見殺しにしているのかといった、強い感情が出てくる瞬間が、日本においても将来、きっとある。そのような事態が起きたとき、私たち人間が選択を誤らないために、恐怖にかられた人類というものが、どう振る舞ってきたか、それを知っておくのは重要です。

人間は、紀元前から、ずっと殺し合ってきました。その主な理由の二つは、恐怖と名誉心だったと喝破した人もいます。一千万人が亡くなった第一次世界大戦、二千万人が亡くなった第二次世界大戦、その歴史を史料から見ていくのが歴史家の仕事です。人々の恐怖に対して、本当の意味で、恐怖を避けることのできる処方箋を、過去の歴史の過程から見つけて人々に差し出すこと、これをみなさんとともにやってみたいのです。(98 ペ)

○イラク戦争について主体となったアメリカでは、2004年、ブッシュ大統領によって超党派の独立調査委員会が設置され、その最終報告書では、大量破壊兵器に関する戦争前の情報機関の判断が完全に誤っていたと認めました。それに比べ、小泉純一郎内閣のもとで自衛隊を派遣した日本はといえば、検証が進んでいません。2009年に簡易な報告書が国会に提出され、2012年に外務省によって省内の政策決定過程についての検証結果が発表されたものの、その中身は四頁だけでした。対するイギリスの報告書は約260万語からなり、イギリスのメディアが『ハリー・ポッター』全七作品の2.4倍の分量だと評したほどです。(118 ペ)

○報告書の、本当に最後の部分、大切な部分に、リットンがなにを書いて結びの文としたかということも参考になりますよ。日本の内田康哉外相が、次のように述べたという

ことにリットンに注目するのは、「帝国政府は、日支〔日中〕関係の問題は、満蒙問題よりいっそう重要なりと思惟す」。内田外相が、日本にとっては満蒙問題よりも、日中関係が第一に重要だと認識していたこと、この点に注意を喚起していました。

たとえば、満州で満鉄の上げる利益（収支の差額）が五千万円くらいに対し、日中間の貿易全体があげる利益は十億円ほどにもなるのだから、中国との妥協こそが大事ではないですか、そこに内田外相も気づいているのではないかと、という期待でしょう。…（中略）…ここで気づくことは、アダム・スミスが『国富論』を書いてから 156 年後、リットンの報告書もまた、同じようなことを論じていることです。リットン報告書の最後は、報告書の主旨が実行できれば、「極東における両大国及び人類一般の最善の利益の為、満州問題の満足なる解決」ができるはず、と謳っていました。…（中略）…スミスが悩み抜いて、経済学を誕生させたのと同じように、リットンらも満州事変では悩みぬいて、世界の武力的な対立・紛争を仕切る、現在の国連平和維持軍の、その本当の原型、特別憲兵隊構想などを編み出した、といえそうです。…（中略）…このように、リットン報告書の内容は、日中両国が話し合うための前提条件をさまざまに工夫したものだ。リットン報告書には、交渉が始まった後、日本側が有利に展開できる条件が、じつのところいっぱい書かれていたのです。…（中略）…本来は交渉の余地がある話だったのですが、国民の目の前に提示されている選択肢は、別のかたちになるのです。

タフな交渉になると予想されましたが、日本と中国が二国間で話し合える前提を、リットンは用意していました。少なくとも、そのような選択肢を提示されたら、じっくり悩んでいい。国際連盟から脱退しようかという大事ですから、悩んでいいはず。でも、「確実に、満州国は取り消される」という選択肢が書かれたら、誰もリットン報告書の内容を読みもしなければ、その含意されたものについて真剣に考えようもしない。こういう、偽の確実性を前面に出した選択肢で国論をリードしたら、みんな、リットンなんて拒否！となってしまふ。

今後、みなさんが十八歳になって選挙権を得たときには、偽の確実性に誘導された設問を、正確な選択肢のかたちに直した上で読む必要がありますね。当時の国民であっても、リットン報告書の全文は、新聞の号外や特別号に掲載されていたのですから、本当はしっかりと読めばよかったです。読めば。(176 ペ)

○今日はリットン報告書と、現実にありえた選択肢について、くわしく見てきました。そろそろ最後のお話になりますが、なぜこの問題が、日本と世界が斬り結んだ場面といえるのか、少し距離をとって眺めておきましょう。

1932 年になされたリットンによる日本への呼びかけは、もう一回、ほとんど同じ言葉

で日本に対してなされます。日本にとって満州が大事なのはわかる。しかし、「世界の道」に戻ってきませんか。日本は正気に戻るのですか、戻らないのですか？と。リットン報告書と同じような呼びかけ、あるいはお説教を、日本がもう一度聞くのは、いつでしょう。…（中略）…

これは、日米交渉の時点なのです。1941年4月から11月までになされた日米交渉のとき、アメリカの国務長官、コーデル・ハルが、リットンとほぼ同じことを言います。

たとえば、もし、日本が中国に対して、善隣友好、主権および領土の相互尊重に関する原則を認めるなら、アメリカは中国に対して、日中間の戦闘行為の終結、平和回復のための交渉に入るようにと促すと。そして、太平洋地域における日米の経済的活動については、それぞれの経済の保全や発展のために必要な天然資源の無差別的均霑（利益や恩恵を平等に受けること）を受けられるように協力すると。ブロック経済ではない、通商無差別、資源に自由にアクセスする権限をお互いに認めよう、ということが提案されていました（1941年6月21日に示されたアメリカ案です）。

このような、ハル国務長官の経済主義の展望が、戦後になって、GATTのような構想として実現するわけです。戦後の日本は、1960年に改訂された日米安保条約第二条のもとで、アメリカに守られながら東南アジア諸国に出て行き、多くの国々を相手にして利益を上げ、経済成長を遂げました。日本は太平洋戦争中、東南アジア地域を侵略しましたから、本来は強く警戒されて、戦後の経済進出は難しかったはずですが。しかし、日米安保と憲法九条の合わせ技で、輸出貿易で経済成長できた。

1932年、日本は連盟の調査団長でイギリス人のリットンに、「世界の道」はあるのだよ、と呼びかけられました。そのほぼ十年後の1941年、今度は、アメリカのハル国務長官に、太平洋の貿易と資源に関する自由経済に関する展望を呼びかけられます。中国や満州を経済的に侵略しなくとも、この体制でやっていけないのではないかと。戦後アメリカがアジアと太平洋を導いていった、その予告編の経済秩序観が示されていました。

日本は、十年おきに、二度までも、こちらへおいでよ、という誘いを英米側から受けていました。日本側には、軍部の主導する満州侵略の道はだめなのだ、と気づく選択肢も時間もあったわけですね。実際に、さまざまな選択肢はありえたのです。その予告編を見せられながら、真珠湾攻撃によって日米開戦するまでの十年間、道を変えようとはしなかったように見える。

世界の道の側に行くのか、それを否定し、植民地を帝国内のブロックに再編しながら、経済をまわしていく道をとるのか。日本人は、植民地をブロック再編して経済を回していく方向を選びました。

アメリカは、「世界の道」について、日本に問いかけながら、戦争を受けて立ちました。

アメリカ植民地を独立させるのが、国民の利益にかなうと考えたアダム・スミスの十八世紀、日中の妥結が、世界の人々の利益にかなうと考え、国際紛争の処理方法を必死に編み出そうとしたリットンやコーデル・ハルの二十世紀。なんらかの「善きもの」を、国民や世界の人々に訴えかけられる力を持った国が、世界をリードしていったことがわかります。(198 ペ)

### 第3章 軍事同盟とは何か

○日独伊三国軍事同盟は、このヨーロッパで戦われている戦争と、すでに1937年7月から始まっていた日中戦争にアメリカが介入することのないよう、アメリカを牽制するため、三国の間に結ばれた条約です。第二次世界大戦が始まって一年経った1940年9月27日、ベルリンで調印されました。

講義で、この同盟条約を取り上げる理由は二つあります。一つめは、この条約がアメリカを牽制するためのものだったからです。同盟締結は、1931年の満州事変とリットン報告書、その十年後の1941年の日米交渉と太平洋戦争、その間になされた日本側の決定のうち、最も重要な決定でした。日米交渉の間、アメリカ側が日本側にずっと求めていたのが、三国軍事同盟なんてやめちゃいなさい、という要求にほかなりませんでした。

1940年9月に日本が行った三国同盟締結という選択は、やはり大きなものだったのです。日本というカードが一枚加わることで、ヨーロッパの戦争が太平洋における戦争と結びつけられることになったからです。…(中略)…

みなさんもお存知のように、日独伊三国軍事同盟は、結果的に、世界の人々を存亡の淵に追い込むような世界戦争の契機となりました。この選択にかかわった日本の判断と選択については、じっくりと考える必要がありますね。(208 ペ)

○2014年7月の閣議決定によって、集団的自衛権の行使が可能となりました。問題は、この閣議決定を法案とした、15年9月成立の安全保障関連法が、どのようなかたちで運用されるかにありそうです。

日米安保条約の条文と、この閣議決定の解釈を抱き合わせて考えれば、日本を直接攻撃してきていない国に対しても、日本はアメリカと共同して攻撃を加えることが可能となってしまうわけで、これはまさに、軍事同盟の世界に今後の日本が入っていくことを意味します。

ですから、日本が過去に結んだ軍事同盟のうちで、最も大きな意味を持つ日独伊三国軍事同盟(もう一つ、日本にとって意味が大きかった軍事同盟は1902年の日英同盟です)を振り返っておこう、これが二つ目の動機です。(211 ペ)

○まとめますと、軍事同盟というのは、まず、仮想敵国というものを設定する発想で書かれる。そして参戦義務なども含め、どのような義務を負うか。それから、勢力圏としてどこを治めたり占領したりするか。仮想敵国，参戦義務，勢力圏，この三つが同盟の必須要素です。(215 ペ)

○1960年に締結された日米安全保障条約は、防衛力構想に大きな変化が生じた場合に改定される。「日米防衛協力のための指針」、いわゆる日米ガイドラインによって、アップデートされてきたと考えられます。(216 ペ)

○日米ガイドラインが防衛する場所とは…

1978年／日本本土（ソ連を太平洋方面には出さない）

1997年／周辺事態（日本の安全，極東における平和に寄与）

2015年／無制限（アジア太平洋地域，これを越えた地域の安全と平和）(217 ペ脚注)

○1939年8月23日に、独ソ不可侵条約を結んで西に向かってくるはずのドイツに対し、それを牽制するため、イギリスとフランスは、なんと2日後の8月25日に、ポーランドとの相互援助条約を結びましたね。ドイツとイギリスは、互いに互いを抑止しようとして、同盟条約の存在を相手方に誇示しましたが、そのような脅しに屈する両国ではなく、結局、ドイツとポーランドの戦争が、ヨーロッパを巻き込む大戦へと拡大したわけです。つまり、抑止していると思っけていても実際にはエスカレートすることが、同盟では起こる。抑止というものは、本当のところ、想像上のもの、感情的なものに左右されがちです。見た目は、危機に対する現実的な対処をとっているようでも、実のところ相手国の敵意だけを増幅しかねない構造を、同盟は必然的に持っています。日独伊三国軍事同盟を現代的な視角から見る意義は、ここにあります。(220 ペ) (下線は柳沢)

○チャーチルの訴えかけの言葉

…いまここで和平を求めて、最後まで戦い続ける場合よりも良い条件を手に入れようと考えすることは、まったく間違いである。ドイツ人はわが艦隊を寄越せというだろう—すなわち「武装解除」のことだ—海軍基地ほかを引き渡せというだろう。われわれは奴隷国家となる。(チャーチルの言葉は以上)

チャーチルの演説を聴いていますと、戦争の継続を訴えるとき、あるいは開戦の必要を訴えるとき、古今東西の政治家や軍人は本当に同じことをいうなあ、との感慨に打た

れます。(敗北すれば奴隷の身分に落とされると、古代ギリシャでもつぶやかれていましたね。73 ページ) (224 ペ)

○ユダヤ人虐殺に関して、衝撃的なことを明らかにした本があります。アメリカのイェール大学のティモシー・スナイダー先生が書いた『ブラックアース』(慶應義塾大学出版会)です。

この本が衝撃的なのは、我々の頭の中にあるホロコースト(ユダヤ人大量虐殺)の固定観念を、事実と史料から崩してくれるからです。殺されたユダヤ人の97%は、当時のドイツの外にいたということ、みなさんは知っていましたか。ホロコーストといえばアウシュビッツ収容所が頭に浮かぶでしょうが、確かにここで百万人ものユダヤ人が虐殺されました。ただ、ここが舞台となるのは1943年から44年のことで、犠牲者の約半分は収容所ではなく、公衆の面前で殺されていたというのです。問題は、国家という行政的なまとまりが地域から消滅させられていた場所で、ユダヤ人の虐殺がやすやすと進んだという点にあります。(230 ペ)

○軍用資源秘密保護法が公布された39年版から、金属工業・機械工業・化学工業についての統計が「丸秘」扱いとなり、一般国民は、これらの生産数量を知ることができなくなっていました。金属・機械・化学といえば、総力戦の時代にあって軍需生産を支える一国の生産能力のすべてと言っても過言ではありませんね。これは、1940年から41年にかけて、日本が直面すべき戦争の見通しを立てる際、死活的に重要な判断基準になったはずで

す。日本の基幹的な産業の生産能力の実態を測る判断材料が、軍や経済官僚の一部だけに握られてしまっていた。軍の最上層部などにくらべて、軍人ではない首相や外相などのガードが甘くなる構造的な理由は、ここにありました。(243 ペ)

○彼ら(若手実務官僚)が話題にしているのは、全部ドイツのことでしょう。

発言を振り返って見ると、みんな「戦後」と何度も言っていました。この戦後って、なんなのか。つまり、この人たちの頭の中では、第二次世界大戦は、ドイツとイタリアの勝利で終わると予想されている。1940年7月段階で、ノルウェー、デンマーク、ベルギー、オランダ、フランスなどぜんぶ負けちゃっているわけです。アメリカは、ようやく兵士の訓練が本格化したばかりだったので、イギリスに対する物資・兵器・艦船以上の援助は無理でした。このあたりをドイツや日本は見透かしていたのですね。

日本の陸・海・外務がなにを話し合っているかという、本当に実利に徹した話です。

彼らがいちばん気にしていたのは、ドイツに敗けた国が持っていた植民地の行方でした。

三国同盟というと、アメリカに対して日本側はどう思っていたのか、その点から交渉過程を見ようとしますね。でもじつは、日本にとって、この蘭印仏印の行方が一大事でした。1932年から33年、国際連盟の提案を蹴った日本が、なんで日本を徹底的に不利な立場に置くかもしれないドイツ・イタリアとの交渉事を断れないかといえ、日本としては目の前に、よりほしいものがあつたからなのです。(273 ペ)

○2015年にアメリカで刊行された、**The Last Warrior** という本があります。この本の主人公は、アンドリュー・マーシャルという人です。マーシャルさんには、第二次世界大戦時のアメリカ陸軍の参謀総長で、戦後は国務長官となったジョージ・マーシャル（ヨーロッパ復興のためのマーシャル・プランで有名）もいますが、こちらではない。アンドリューのほうは、1969年に大統領となったニクソン政権から、引退する2015年まで、すべての国防長官に仕え、冷戦期アメリカの対ソ戦略を頭脳で編み出してきた人物です。

この原書を読み始めていたら、邦訳も出ました。(『帝国の参謀』日経BP社)。すごく面白い本ですので、近くの大人、お父さんやお母さんに、「生きるのに役立ちます」などとそののかして買っていただき、中身はみなさんが読んでください(笑)。

帯には、「そのコスト強要戦略で旧ソ連を崩壊に導き、『ペンタゴンのヨーダ』と呼ばれた男」という惹句が書かれている。ヨーダというのは、映画『スター・ウォーズ』の最長老の指導者名です。アメリカ軍の総本山・国防総省(ペンタゴン)を指導していたマスター・ヨーダ。国防長官の師匠ということでしょう。

戦後のアメリカ軍が知力を尽くして分析したいと心から願っていたのは、ソ連の軍事指導者、ソ連の作戦立案者の頭の内部でしょう。戦略分析の隘路は、自分と同じような考え方を相手方もするという前提で考えてしまう陥穽にはまりやすいことです。そのような、陥穽、落とし穴にはまらないようにするため、マスター・ヨーダがずっと考え続けていた問題が二つあります。

一つは、1940年5月から6月、ドイツがベルギーを越えてフランスに侵攻したとき、なぜドイツ軍が圧勝したのか、なかなかその理由がわからないというのです。英仏連合軍は、兵士、師団、戦車の数ではドイツを上回っていました。

冷戦期のアメリカでは、西ヨーロッパの同盟国軍であるNATO軍と、ソ連の衛星国からなる東ヨーロッパの同盟国軍であるワルシャワ条約機構軍について、適切な戦力比較を行うために、入念なデータベースを作成しようとしていました(動員可能総人員、対空兵器、地対地ミサイル砲、戦術航空機の数などを入力し、武器体系の質的差異にも対応できるような戦力評価指標をつくっていた)。

ペンタゴンのヨーダが非凡なのは、この戦力評価システムが役立つものかを判断するため、ドイツ軍の西方電撃戦における、ドイツ軍と英仏連合軍の数値データを入力してみるのです（ママ）。出た結果（勝敗）が、実際の戦史の結果と同じになれば、ペンタゴン作成の戦力評価システムは使える指標だということになります。けれども、戦力評価システムでは、ドイツ軍の圧倒的勝利という結果にならないのです。ということは、戦力評価システムに、別の要素を入れ込まなければならないとわかる。そこから、欺瞞と奇襲、戦術、制空権、指揮統制、地勢、装甲システムと対装甲システムなどにも着目しなければ、という視点が出てきます。ドイツ軍がなぜ圧倒的勝利を占めたのか、それを予測する戦力評価システムをつくること、これが冷戦期アメリカの意地だったといえるのではないのでしょうか。

ヨーダに、もう一つの謎を提供したのは、1941年12月、日本による真珠湾奇襲攻撃でした。これは次の章の日米交渉のテーマとなりますが、気になるでしょうから、短く言いますね。アメリカは、日本の暗号解読によって得た情報、「マジック」によって、真珠湾攻撃が近いことを明らかに示唆していた合計15の異なる暗号を得ていた。にもかかわらず、アメリカにとって真珠湾攻撃が戦略的にも戦術的にも衝撃的であったのはなぜか（くわしくは、4章で）

第二次世界大戦を勝利に導いたアメリカにおいて、戦後になってもずっとアメリカ軍の戦略分析者の頭を悩ませ続けた二つの謎、その謎を提供した二つの国こそドイツと日本なのです。

ドイツの電撃戦に、世界がどれほど目を奪われたか。目を奪われて当たり前というぐらゐの感覚だったことが、ペンタゴンがずっと分析し続けたことからわかる。

ちなみに、この『帝国の参謀』の解説は、谷口智彦さんという人が書いています。谷口さんの名前は、どこかで聞いたことがありますか。安倍総理大臣が、2015年4月、アメリカの上下両院議会で演説したときのスピーチライターで、戦後七十年の歴史認識の文章に関して、最後に手をいれたと伝えられる人です。このペンタゴンのヨーダくんは、最後の仕事として、軍事的な超大国となっていくはずの中国への対抗策について研究していました。官邸周辺も真面目にヨーダくんの分析を読んでいるのでしょう。もちろん、それを高校生がしっかりと知っておくことには意味があります。（282ペ）

○太平洋戦争の負け方というのは、同じ敗けるにしても、負け方にもほかに手があつたのではないかという研究があるくらい、ひどい負け方でした。戦争は、相手の嫌がることを相手に強いる行為です。アメリカは、ランド・ホップ作戦（制空権下に置いた島を適宜飛び越えつつ西太平洋を前進する）をやって、自らが最も有利に戦える戦場を選び

つつ戦争をやる。米軍によって飛ばされ、補給の途絶した島々にいた日本兵の大半は餓死せざるをえない。日本軍の補給線が伸びきったところで、艦隊決戦などせずに、航空機による決戦で勝負が決まってしまった。五対三という数値をのんだ時点で、日本はアメリカと対抗する道を、本来は諦めなければならなかった国だったので。

これらの戦闘が行われた地域では、日本兵が歩いた場所は地図がなくても歩けるといわれていました。なぜかといえば、白骨が収容されないままに、道沿いにさらされて板からです。これは陸軍側が1930年3月に、紙の上で見た地獄そのままでしょう。

陸海協同作戦を立てる部署の人間には、「絵」が見えているんですね。彼ら専門家に見えている絵を、我々国民はチェックして、彼らに反論しなければならない。そのような素養をやしなっておく必要があります。(298 ペ)

○本日は、日独伊三国軍事同盟とはどのようなものだったのかについてお話ししました。アメリカを牽制する同盟でしたが、日本が本当にほしかったものは、仏印蘭印など、宗主国を失った植民地だったわけです。そのための同盟であり、そのための大東亜共栄圏というスローガンでした。植民地解放などというスローガンは、後からつけられたものです。陸海外三省の代表者などが、内輪で協議している議事録を読めば、日本の赤裸々な姿が浮かびます。理念がないのです。人を惹きつける理念が。(299 ペ)

○戦略的資源の有無、国土面積・人口・資産の多寡、技術力の高低などからすれば、地球上に存在する国家、その為政者、その国民が持つチャンスは、最初から全く公平なものではありません。しかし、為政者や国民が、目の前の事態に対して、判断し、選択するための「時間」は、あまねく公平に与えられているのではないのでしょうか。イギリスのチャーチルは、国論をまとめるために、国民の代表者である国会議員に対して説得しました。中国の蒋介石は、軍部のトップが対日妥協をせよと促したにもかかわらず、中国にとって選ぶべき選択肢を三つ、あるいは五つくらい立てて、考え抜きました。

かたや日本では、課長級の事務当局者が唱える目先の利益から国家のスローガンを後づけの論理でつくりあげ、最も密接な協議が必要な陸海軍の組織間で、腹を割った正直な検討は、十年も前から起こりうる事態が正確に予測されていたのに、実質的な検討は行われなかった。公平に与えられていたはずの「時間」が、日本の時空では機能していなかったように思えてなりません。歴史に学ぶといったとき、このような点こそ学ぶ必要があります。

現在を考えますと、これまでの日米安保条約は、簡単にいってしまえば、基地を日本に置くかわりにアメリカは日本を守る義務を持つという基地交換協定でした。それが今

後変わってくる。それを予期しなければいけない世界に、みなさんは生きています。(302 ペ)

#### 第4章 日本人が戦争に賭けたのはなぜか

○アジア歴史史料センターは、インターネット上の一次史料貯蔵庫です。これは、1章でお話しした村山談話とともに、日本政府が戦後50年というところで取り組んだ事業の成果の一つです。国立公文書館が運営し、主として戦前期に作成されたホンモノの一次史料を、誰でもどこでも何度でも見られる、画期的な史料蔵です。「インターネット特別展」という特集には、「公文書に見る日米交渉」という項目もある。いま言ってくれたように、主要人物の紹介、年表、用語解説まであり、私（加藤氏）の説明など要らなくなります。(312 ペ)

#### ○イギリス首相兼外相代理のチャーチルから松岡外相に宛てられた手紙

(1) ドイツは1941年の春、夏あるいは秋において、制海権またはイギリスの白昼の制空権なくして英国を攻撃して制服しうるのでしょうか。(原中略) これらの問題が判明するまで、待つのが日本にとって有利ではないのでしょうか。

(2) 英国および米国が、その全工業力を戦争目的に転換したとしても、米国の援助が英国海岸に到達しがたきほど、英国の海上輸送に対するドイツの攻撃が強力であるのでしょうか。

(3) 三国同盟への日本の加入が、現在の戦争に対し、米国の参戦を容易にしたのでしょうか。あるいは困難にしたのでしょうか。

(8) 1941年には米国の鉄鋼の生産高は7500万トンになり、英国においては約1250万トンになり、合計してほとんど9000万トンになるというのは真実でしょうか。万一、ドイツが以前のごとく敗北すれば、日本の鉄鋼生産高の700万トンは、日本単独の戦争のためには不十分でないのでしょうか。

これらの問題に対する解答を考えうるならば、日本は恐るべき災難を避けて、西方の偉大なる海国、英国とますます提携の要を感ずるでしょう。(手紙以上)

チャーチルは、松岡外相を怒らせるのは覚悟のうえで、日米交渉の前に、こう書いて寄越すのです。たとえば松岡がチャーチルの手紙に激怒したことが日本政府部内で広まれば、逆にチャーチルの手紙の内容に注目が集まるというものです。日本側が言われていちばん嫌な問いを發して、日本の選ぶ道を考えさせていました。(331 ペ)

○アメリカは日本に第一打を撃たせた、真珠湾攻撃のことを、ローズヴェルト大統領や

ハル国務長官とか、何人かは知っていた。けれども、現地の人には言わず、日本に騙し討ちさせるようにした、という見方があります。でも、これが全く嘘であることは、アメリカの国防総省が研究し続けていることからわかる。3章で紹介した、ペンタゴンのマスター・ヨード、アンドリュー・マーシャルさんが、ずっと研究史続けていたケースのうちの 하나가、日本の真珠湾攻撃だとお話ししましたね。

日本政府や軍の指導者は、真珠湾攻撃の前に、自国がアメリカとの長い戦いを乗り切るための産業基盤や軍事力を持たないということを知っていました。日本側にその自覚がありながら、開戦に踏み切ったことを、アメリカ側も戦後に知りました。

アメリカの側も、膨大なマジックを解読し、後から精査すれば、日本の真珠湾攻撃を予測できたかもしれない15の明確なヒントがあったというのです。にもかかわらず、なぜアメリカは、それを活かせなかったのかを分析した優れた研究として、ロベルタ・ウールステッターという女性研究者による『パールハーバー』があります。…(中略)…アメリカは、多くの情報の中に含まれるノイズと呼ばれるどうでもよい情報から、真に大事な情報を選び分けることが全くできていなかった。…(中略)…なぜ、アメリカは、日本を抑止できなかつたのか。なぜ、1対700の石油生産、1対12のGDP差というようなことがわかっていても押しかけてくる国があるということを見落としたのか。これはアメリカの戦略分析では、戦後の冷戦期、ソ連の不合理な行動を予見するプログラムを開発する際の、非常に重要な歴史的教訓とし続けたといいます。(417ペ)

○自分たちの身の回り3メートルの世界の幸福を考えていて良いはずの民衆が、なぜ、一番強硬なところへ、天皇も恐れなければならない勢力や意見に引っ張っていかれちゃうのか。その哀切さに、誰しも打たれますね。これを避けるための一つの知恵は、教育だと思うのです。この話になると私も頭に血が上りますが、戦前期においては、女子という、人口のおおよそ半分を占める人間に、男子と同じ教育を授けてこなかった。また、尋常小学校から高等小学校までの教育と、中等学校以上の教育の内容がかけ離れていました。

普通の子どもたちにとっての天皇は、修身の授業で習う天孫降臨神話の中の登場人物です。本当の古代史上の天皇について、史料から日本史を教えてもらえるのは、旧制高校に入ってからようやく一年目です。これは、中国の史書なども用いることで、批判的に古代史を教えてもらえたわけですね。しかし、その真実を教えてもらえた人は、割合からいえば、100人に一人くらいしかいなかった。正直な教育が大事ですね。(421ペ)

○日米交渉における近衛メッセージが新聞に掲載されたとき、ああ、これは「世界の道」

であって、当然のことを近衛は言っていると思える気持ちに、普通の人々がなれるような教育がなされ、情報が公開されていなければならなかった。尾崎<sup>ほつみ</sup>秀実や昭和天皇が述べていたことは、今、読み返すと、本当に普通のことを言っていますね。逆に、近衛を脅かしたような人々がビラで述べていたことを現在読むと、信じられない気持ちになる。このギャップを肌で感じておくことが大事です。

逆に言うと、私たちが後世の人から同じように批判されるかもしれない。後世にとって、現在が鏡になる可能性もある。鑑とも書きますね。歴史が鏡だという意味はそこにあります。過去の歴史を正確に描いたり学んだりしていれば、自然に自分の将来や未来をつくることにつながる。歴史を学ぶ意味は、ここにあるのだと思います。(422 ペ)

## 終章 講義の終わりに

○2015年4月に朝日新聞が行った世論調査では、1945年8月15日に終了した戦争について、「日本人がなぜ戦争をしたのか、自ら迫及し、解明する努力を十分にしてきたと思うか」という問いに対し、「いまだ不十分である」と答えた人が、なんと65%もいたのです。これが、戦後70年の数字であることに、あらためて注目してください。(457 ペ)

○この講義の目的は、みなさんの現在の日々の生活においても、将来的に大人になって社会人になった後においても、交渉事にぶちあたったときに、なにか、よりよき選択ができるように、相手方の主張、それに対する自らの主張を、掛け値なしにやりとりできるように、究極の問題例を挙げつつ、シミュレーションしようとしたことにあります。

見かけだけの「確実」性にだまされたり(リットン報告書の一件です)、相手から自分だけ最大限の利益を上げようとして普遍的な理念を掲げることを失念したり(三国同盟の一件です)、自国の安全について、自らリスクをとる覚悟がないまま、被動者としてふるまいつつ結果的に戦争に近づいていったり(日米交渉の一件です)、現時点から見れば、戦前期の日本がとってきた行動は、残念な、歯がゆいものばかりに見えます。(458 ペ)

○日米交渉の場合が顕著ですが、日本の陸海軍省や外務省など、本音や自分の弱いと自覚している部分を、アメリカに隠すのみならず、日本の国民の前からも隠し、交渉をしていました。内輪の議論では、絶対にアメリカと戦争をしたくないと、常に述べていた海軍の姿など、当時の普通の国民には絶対に想像できなかったに違いありません。

ならば逆に、外交交渉で相手方の説得に失敗したときには、もう自国民の前に、すべてを正直に見せて、謝ってしまうことは、一つの道ではないですか。ゼロから、また国

民を説得しつつ、普遍的な理念の言葉で語れるような中身を、交渉の題目にしていく。このような転換策は、ありうるのではないのでしょうか。(459 ペ)

おわりに (柳沢注：ここに著者の思いが凝縮されていると思う)

○18世紀前半の近世社会にあって、人間が主体的に社会秩序を作為し、変革することができると思った人物に儒者の荻生徂徠がいました。徂徠の思想の中に、そのような近代的思考の萌芽を見たのが、戦前期の若き丸山眞男であったのは、ご存知でしょうか。その徂徠が、「学問は歴史に極まれり」と述べていたことを知ると、私はなんだか励まされたように感じます。意味するところは、学問の中では、歴史が最も大切だといったあたりでしょうか。

これも徂徠が教えてくれたことですが、いにしえにあって学問は、「飛耳長目の道」と表現されていたといえます。飛耳長目とは、あたかも耳に翼が生え、遠くに飛んで行って聞いてくるように、自国にいながら他国のことを理解することであり、また、あたかも望遠鏡のように遠くを見通せる「長い目」で眺めるように、現在に生きながら昔のことを理解できること、という意味です。つまり、自国にいながら他国のことを理解し、現在に生きながら昔のことを理解するのが学問であり、その極めつけが歴史なのだ、ということなのです。

この本の1章の冒頭で、「歴史のものさし」で世の中をはかってみようとお話をしたとき、私の頭の中にあっただのは、徂徠のいう、この「長い目」という言葉でした。グローバル化が極まったこの時代、18世紀の思想家による歴史の定義など、あまりにも無力だとお考えの方もいるかもしれません。しかし、地球の誕生が46億年前なのに比して、現在のヒトの祖先は約50万年前といえますから、長い目で見てくださると幸いです。(2016年7月 参議院選挙結果の報を聞きながら) (466 ペ)

\*

借りてからメモを仕上げるまで極めて長い時間がかかった本であった。講義形式で分かりやすい文体であることは確かだが、その分、論理の展開がふやけているように見える部分があって難儀した。(読み終わって、「まえがき」と「おわりに」を再度精読してみると、要点はそこにきちんと書いてあった。つまり、両者について、私の「読み込み」が不足していたということである。恥ずかしいが…書いておく)

「歴史を学ぶことで未来を見通す力を得ることができる」ということが著者の主張であり、その実例として「戦争に至るまでの日本政府中枢での重要な判断の積み重ねがあった」ことが紹介されている本であると理解した。今から見ると、当時の為政者たちは、①歴史を十分に学んでいるとは言えない。②冷静な情勢分析が十分出るとは言えない。

③戦争に勝利するための戦略が立てられたとは言えない。また、現在の日本人も①～③が当てはまるとも思った。さらに④現代の日本人は、敗戦の歴史を教訓として十分学んでいるとは言えない、ということも付け加えなければならない。要するに、私たちには、歴史を学ぶ、歴史に学ぶ、という正しい勉強がもっと必要なようである。

### ◎内田樹著『日本の覚醒のために(内田樹講演集)』(晶文社・2017年)(私物)

古くからの友人のU氏が書いた書評を本人の許可を得て引用して紹介する。

「先生、内田樹さんが新刊を出しましたね。もう読まれましたか？」

『ああ、読んだよ。今回は講演集だね』

「...それで、どうでしたか？」

『キミは「粗製濫造本」かどうか心配しているんだろう？ 全く心配いらないよ。それはそれは見事なものだよ』

「でも、あの出版社は本来、映画関係に強いところだったはずですよ。時事問題の講演集が出るのは珍しいんじゃないですか？」

『最近はそうでもないようだ。だが、それがどうしたというのだね？ 内田さんは映画の物語分析的な鑑賞と同時に社会批評を得意とする人だから、「本筋」なんだよ。とにかく読んでみなよ。素晴らしいから』

「じゃあ、そうします。それで、どんな講演が収められているんですか？」

『私がここまで言っているんだから、何も言わずに即買いして読むのが一番なんだよ。しかし、それじゃ、レビューにならないから、ちょっと真面目に紹介してみよう。まず、「まえがき」は要するに「もう起きなよ！」という話。次に全部で6つの講演。タイトルはⅠ.資本主義末期の国民国家のかたち、Ⅱ.これからの時代に僧侶やお寺が担うべき役割とは、Ⅲ.伊丹十三と「戦後精神」、Ⅳ.ことばの教育、Ⅴ.私が白川静先生から学んだこと、Ⅵ.憲法と戦争—日本はどこに向かうのか、だよ』

「どうせまた、例の「日本＝属国」論なんでしょうね？」

『えっ？ キミはまさか、いまだに「日本は米国の属国ではない」とでも思っているのかね？』

「そういうわけではないのですが...。もう何度も聴いているので...知ってます。そういうことは...」

『まだこの認識は日本社会に十分に浸透しているとは言えないと私は思うよ。だから、Ⅰは今こそ味読する価値があると思うねえ』

「それなら、Ⅲもそうではありませんか？」

『そのとおり。Ⅲは要するに「敗戦国民であることは恥ずかしいことではない。恥ずかしいのは敗戦国民であることを隠そうとすることである」ということが書かれている。同時に、「最強の伊丹十三論」にして、「最強の日本人論」になっているんだな』

「...なるほど。Ⅰと繋がっているのですね。Ⅱは抹香臭い話ではありませんか？」

『そう思うでしょ？ でも、じつは全然違うんだね。Ⅱは「宗教に対する理解が深いほど、判断は正しくなる」という論理だ。根拠となっている武道論・宗教論も見逃せない。とても見事だよ』

「では、Ⅳはどうですか？」

『まとめると、「コミュニケーション能力とはコミュニケーションが成立しなくなった局面を打開する力である」、「国語力とは想像する力のこと」、「コミュニケーションはクリエイション」ということかなあ。強く引き込まれるような魅力がある。補強に使われている江藤淳、村上春樹の文学論がまた素晴らしいんだよ～』

「何のことなのか、よく判らないのですが...」

『ランダムに一節を紹介してみよう。「...嘘をついている人間の言葉は内容的にどれほど整合的でも直感的に聞き分けることができます。嘘をついている人間は微妙に早口になるし、共鳴する身体部位が少ないので倍音が出ません。〔顔の悪い結婚詐欺師はいるが、声の悪い結婚詐欺師はいない〕という、俗諺がありますけれど、これはたしかにその通りなんです。〔声がいい〕というのは身体から倍音が出ているということだからです。...」、どうだい？ こういう一節を読むだけでも、講演の躍動感が伝わってくる気がしないかい？』

「そうですね。先生の紹介してくれた部分は、文学論とは違うけれど、どこかの国の国会議員に教えてあげたいような内容ですね」

『そのとおりだね。私たちは言葉が身体や歴史と如何に深く結びついているかということ、もう一度感じ直し、かつ、考え直す必要がありそうだ』

「ⅤとⅥについても教えて下さい」

『Ⅴは「著者は白川静氏から①文体、②祖述者という立ち位置、③呪術的世界観について多くを学んだ」という内容。Ⅵは「日本の社会システムは急速に劣化し、壊れはじめている」ということが書かれているね』

「な...なんか、後味が...」

『大丈夫。オマケに「SEALDs KANSAI 京都集会でのスピーチ」がついていて、「見どころのある若者たちが出てきたから、そんなに絶望したものでもない」と言っている。だから、大丈夫なんだよ』

「なるほど、お口直しのデザートみたいな話ですね」

『なかなか上手いことを言うね。それに「あとがき」がまた素晴らしい。「[火事場の馬鹿力] 恐るべし」という話。著者自身のことなんだが、これがちっともイヤミではないんだな』

「ちょっと、褒めすぎではありませんか？」

『いや、そんなことはない。これは後世に語り継がれるべき名著だよ』

「ホントですか？」

『まあ、黙って読んでみなさい。あ、もちろん、音読でも良いんだけどね（笑）』

「こんなに詳しく紹介してしまって、大丈夫でしょうか？」

『ここまでの話はこの本の魅力の1%も伝え切れていないから、安心して買うといいよ』

「わかりました。じっくり読み込んでみます」（了）（1986字）

＊

とにかく、素晴らしい本である。シャープペンシルで要所に傍線を引きながら読み進めたが、傍線だらけになってしまった。この本には「模倣と創造」に関する素晴らしい「解答」ないし、「回答」が含まれている。「IV.ことばの教育」がそれである。

### ◎春日太一著「なぜ時代劇は滅びるのか」(新潮新書・2014年)(私物)

ネット上でこの本があることを知り、レビューを読んで気になったのでamazonで注文してみた。気になった部分を引用する。単なる時代劇の批評でなく、たとえば、国会をはじめとする日本社会の「劣化」、公立学校の衰退、さらに科学教育映画の衰退等と絵柄を重ねて読むことができれば、得られるものがさらに大きくなるのではないか。

＊

○「所詮映画は手作り。人材が欠乏すれば終わりです。私たちの時代は月給をもらって勉強できたわけです。メジャー系製作がほとんど消え失せ、不定期雇用、契約(フリー)で食いつなぐスタッフにリッチは程遠く生活に余裕がありません。次世代が育つ環境への警鐘を打ち鳴らしていただきたく思います」(時代劇カメラマン、森田富士郎から著者への言葉)(38ペ)

○「テレビ時代劇の危機」は、テレビ局の体力、つまりスポンサー企業の体力の問題、突き詰めれば日本の景気の問題が背景にあった。もし日本経済が劇的に復活することがあれば、テレビ時代劇のレギュラー枠が復活する可能性はあるだろう。(47ペ)

○時代劇の舞台となるのは、とにかく逃げ場のない時代だった。だからこそ、個人と社会(組織)、男と女、道徳と個人など、さまざまな相克が命を賭けた激しさを伴う。結果、

ドラマとして濃密なものになる。

サスペンス，アクション，ドラマ……時代劇は本来，優れたエンターテインメントの表現手段なのだ。(56 ペ)

○それまでは「カネをもらって人を殺す」という裏稼業の世界に生きる者たちの活躍を，血塗られた彼らの哀しみや苦しみと共に描いたハードボイルド色の強い作品が続いた。それが 1979 年『必殺仕事人』がロングシリーズ化していく中でパターン化していく。

まず，ドラマ的必然と関係なく，『必殺』の定番が盛り込まれた。また，「悪」は「権力・財力を背景に庶民を泣かす」という形で単純化され，「殺し」は「陰影の強い画面の中でのプロの仕事の華麗さ」という形で様式化される。そして，御馴染み，主水が嫁・姑にイビられるシーンで番組が終わる。

ここでは，それぞれの要素が絡み合って一つの頂点に向かうのではなく，それぞれが別々の見せ場として存在しているのである。

「殺し」はドラマの頂点としての「殺し」ではなく，様式を楽しませる独立した見せ場＝ショーとしての「殺し」になる。また，「日常」描写も，凡人の切なさを描いて視聴者との橋渡しにするための「日常」から，風俗パロディを楽しませる「日常」へと変質する。…(中略)…『必殺』は《ハードボイルド》から《バラエティーショー》へと華麗なる転身を遂げたのである。…(中略)…

こうして 1970 年代後半，「時代劇はワン・パターンで古臭い」という現在に至る時代劇への偏見と断絶が生まれる土壌が出来上がっていったのだ。(67 ペ)

○『水戸黄門』のワン・パターンな作り方は，高齢視聴者をあえて意識したものだったのだ。…(中略)…今から三十年前，自らの生き残りのために時代劇の表現を狭めていったことで，結果として，衰退へのスイッチを押してしまったのだ。(74 ペ)

○時代劇づくりにおいては，「嘘の世界」を「本当っぽく」見せることが何よりも大事だ。(82 ペ)

○「伝統を守る」ことは，先例をただ遵守することではない。培ってきた技術を背景に，現在のテクノロジーに合った形で，現代の観客の心に届く表現をしていくことなのだ。(85 ペ)

○ファンタジーとして完璧な世界を構築するということは，その世界の隅々まで自分た

ちの手で創造するしかない。そのため、ただ考証に忠実に作る以外の創造力が細部まで要求される。

「ファンタジー」を「作る」ということは観客に対して「ありえない大ウソをつく」ことだ。が、それが「ウソ」だと感じられると、観客をシラケさせてしまう。ウソを本当だと信じ込ませるためには、たえず観客の心を作品世界の中に掴みつけて放してはならない。その苦闘の果てに生み出されるのが「ファンタジー」なのだ。

イイ加減な姿勢で作られた時代劇は「ファンタジー」でもなんでもなく、「イイ加減な時代劇」に過ぎない。(97 ペ)

○時代劇において「自然体」とは「現代人の日常を再現する」ことでも、ましてや「何もしない」ことでもない。「作り込んだ芝居」を観客に違和感なく受け止めてもらうために技術を尽くした結果得られるもの、それが「自然体」なのだ。かつての名優たちは皆、その苦闘の果てに素晴らしい芝居を時代劇で提示し、観客を興奮・感動させてきた。

何度も書いてきたが、時代劇で最も大切なのは「ウソを本当に見せる技術」である。それを否定し、現代的な日常の「自然体」で演じてしまえば、設定や衣装などの「ウソ」の部分がかえって際立ち、観る側はシラけるだけだ。

時代劇において「自然体」とはただの手抜きでしかない。それでもなお「自然体」で通用すると思っただけで客前に出るとするのは、己を過信し時代劇を侮った傲慢でしかない。だが、それがまかり通ってしまったのが、2000 年前後から近年にかけての時代劇だった。(115 ペ)

○かつての東映の入社試験には「芸術職採用」という枠があり、そこから監督・プロデューサー・脚本家の候補生を社員として入れて、監督候補生は助監督として現場に配属していた。が、当時の京都撮影所長である岡田茂が現場の合理化をはじめた 1965 年を最後に 30 年近くこの枠はなくなる。つまり、次世代を担う監督の育成を、東映はこの段階で捨てていたのだ。…(中略)…こうして「組織で人を育てる」という、かつての撮影所の雰囲気は薄れていく。(126 ペ)

○1970 年代以降、映画界が斜陽に向かう中、邦画各社は経営の効率化を図って最も維持費・人件費のかかる製作部門を切り詰める。現場に関わる人間は全てフリーの扱いで、正社員として採用することはなかった。現場で働く若者たちは生活に追われるばかりで「学ぶ」余裕はない。(127 ペ) (「高校講師」の現場でのポジションと相似)

○芸事への基礎教養や時代劇製作の基本が身につくにつれて初めて、自分なりの時代劇の解釈が見えてきて、独自のアプローチで演出することも可能になる。が、近年の監督にはそれがないうえ、どこをどうアレンジすれば時代劇を自分なりの作品世界に昇華できるかが分かっていない。…（中略）…基礎があるから逸脱ができる、ということだ。（130 ペ）

○長年に亘りテレビ時代劇のプロデューサーを務めてきた第一人者・市川久夫は「脚本と役者がしっかりしていれば、監督は三流でいい」とよく言っていたという。（132 ペ）  
**（柳沢のつぶやき、「教材（授業書）と生徒がしっかりしていれば、教師は三流でいい…」「楽譜とオーケストラがしっかりしていれば、指揮者は三流でいい…」のかも知れない**

○監督がモニター前から離れない作品ではスタッフや役者の集中力が欠け、熱気が薄いことが多い。監督が自分たちの芝居を正面から見ているかどうかで、役者の集中度合・緊張感は全く違ってくるのだ。（144 ペ）

○人材を育成するためには実地の経験を多く積ませ、時には失敗し、その試行錯誤の経験を通して《本物》に成長させるしかない。だが、近年の時代劇には、その失敗を許容する余裕がなかった。（147 ペ）

○今の『必殺』には火野正平（個性ある三枚目役者）がいない。（150 ペ）

○とにかく、企画に関しても役者に関しても、「目利き」であるプロデューサーがいないのだ。（160 ペ）

○近年の時代劇の脚本は、説明が過剰だ。（166 ペ）

○役者・監督・プロデューサー・脚本家、それぞれが手前勝手な事情に右往左往し、意識から観客が《不在》になっていることである。繰り返すが、「時代劇は現在進行形のエンターテインメント」である。まず考えるべきは、「どうすれば観客は楽しんでくれるか」だ。作り手たちがそれを忘れてしまったのだから、時代劇は廃れてしまっただけで当然といえる。（170 ペ）

○清濁を併せ飲み、虚々実々の駆け引きができるようになること。それがかつての大河

ドラマにおける主人公の「成長」であった。

だが、『利休とまつ』以降は「自らの理想と信念を貫いて周囲を変化させていくこと」が「成長」と捉えられるようになった。そこには、苦渋の決断をめぐる葛藤は存在しない。描かれるのは、ダークサイドを一切持たずに、己の理想を押し通しながら健全にスクスクと生きていく主人公たちの姿だ。大河ドラマは、以前からキャストや脚本家に「朝の連続テレビ小説」組が起用されることが多かったが、近年はドラマツルギーまでが朝ドラ的に健全化してきているのである。(196 ペ)

○恐らく、時代劇はこのままではそう時間のかからないうちに「死ぬ」だろう。人を育てることを放棄し、若者が希望を持ってない業界に未来などないからだ。(207 ペ)

\*

景気の良い話ではない。したがって、後味はあまり良くないのだが、あるシステム興亡に関わる起承転結のエッセンスが含まれていることが分かったので、良かった(有意義だった)。

すなわちそれは、「**興隆→定式化→形骸化→衰退**」という一連の移り変わりであると思う。日本に生き、公立学校というシステムの中にいる一員として、他人事でないと感じた。大きな教訓が得られて、有意義であった。孫子の兵法にあるように、次なる段階に至る前に「備え」しておくことが必要だ。この本にも「模倣と創造」に関わる見事な「回答」ないし「解答」が含まれているのは確かだ。

### ○岩城宏之著『棒ふりの休日』(文藝春秋・1979年・ハードカバー第3刷・1981年)

篠ノ井高校の廃棄本としてこの3月に放出された山からの拾いもの。指揮者の故・岩城宏之氏(1932～2006)のエッセイ集。週刊文春などに連載されたものをまとめた本。とにかく話題に飾り気や気取りがなくて面白い。なかなかの健筆ぶりで、しかも「腕」は確か。1991年には日本エッセイストクラブ賞を受賞しているほど。「エッセイも書く名指揮者」岩城氏はかつて「指揮もするエッセイスト」と揶揄されたこともあるほど(笑)だと何かの本で読んだ。

あのモーツァルトもビックリするほどの尾籠な話があちこちに。今ではこのような本は出版できないであろう。それにしても、面白い。その中から「模倣と創造」について深く考えさせられる一節を引用しておく。

○(ブダペストのオーケストラで日本の曲を振ったことについての話)…日本では小節という節回しの方法があって、喉をちよつとつめて、アアアというふうに即興的に演奏

する、というようなことをドイツ語で説明した。日本でなら、ここはひばりのようにとか、そこは森進一のように、あそこは都はるみのようにとか言えばいっぺんで通じてしまうことでも、なにも知らない外国のオーケストラにそういうことを注文することはたいへん難しいことなのだ。

向こうは、一生懸命ぼくの注文どおりに演奏しようとする。なんとか、日本的に笛を吹こうとする。だが、何も日本のことを知っちゃいないのだ。無理もない。努力すればするほど、ぼくの要求するところの「日本的」なるものからどんどん遠ざかる。つまり、フジヤマ、ゲイシャ、リキシャのイメージぐらいしかせいぜいな人が、それだけのイメージをふりしぼって「日本的」にしようと懸命になり、即興的でない人工的な節回しをすればするほど、似ても似つかないものになってゆく。

言わなければよかった、と後悔したがもう遅い。彼は夢の国日本を見事に表現したつもりで、よい気持ちになっている。本当は、架空の「日本的」なるものを彼につくらせずに、楽譜どおりにすんなりと演奏させたほうが、ずっと「日本的」だった。よけいなことを言わないで、作曲家の書いただけにまかせるべきだったのだ。

こういうことは、じつは一年中経験していることで、なまじっか説明をして、麗しき誤解からの協力を得ると、かえって困ることが多いものだ。ウィーン・フィルハーモニーの演奏するウィンナワルツだけが本物だと言われている。本当に彼らのウィンナワルツはすてきで、世界のどの他のオーケストラも真似ができない。真似ができないものだからよけい真似をしてしまうものである。

それで世界中のオーケストラはウィンナワルツのもつウィーン独特のリズムを、ウィーン・フィルハーモニーの何倍も大袈裟な演奏の仕方をして、じつはウィンナワルツからどんどん遠いものになってしまう。本場のウィーンフィルはじつにあっさりこのリズムをやっけてのけていて、だがこのあっさりというものが真似できないのだ。

ソ連のオーケストラは、思ったよりもチャイコフスキーをあっさり演奏しているし、チェコのオーケストラは、ドボルザークをやはりすんなりと演奏している。一見、いや、一聴、ロシアらしくなく、チェコらしくなく聞こえる。だが、このロシアらしきとか、チェコらしきとか、日本らしきとか、ドイツ、フランス、アメリカ……らしきというのが、くせものなのだ。

本場の人たちは、自分たちの本物を、なんとか本場らしくなぞとは、それぞれ、毛頭思っていない。本場ではないから、本場らしくやろうということになり、これ即ち本場らしくなくなることになる。本物でないものが本場のようにやろうということに、すでに無理があるのだし、本場らしく、なんて思わなくなったときに、本場らしくなることが多い。だが本場っていったい何だろう。本来、存在しないものなのかもしれない。(133

ぺ)

\*

楽器を使わない表現者の心の中の矛盾とか葛藤というものが手に取るように分かる見事な表現だと思う。板倉聖宣著『発想法かるた』（仮説社）にある「見栄っ張りの独創気取り」というかるたがしみじみと思い出される気がした。

◎ジム・ドノヴァン著・弓場隆訳『何をしてもうまくいく人のシンプルな習慣』（ディスカヴァー・トゥエンティワン・2016年）

良くあるタイプの自己啓発本。小型ですぐ読み終わることができる。「いいな」と思った部分を引用しておく。

○「終始一貫した目的を持つこと、それが成功の秘訣である」（19世紀英国の首相ディズレーリの言葉）（28 ペ）

○「自分ができると思おうが、できないと思おうが、あなたは正しい」（ヘンリー・フォードの言葉）（35 ペ）

○私は最近、ある友人と話していて、スカイダイバーたちが空中で互いに手をつなぎ合わせるためには、自分が手をつなぎたいと思う相手の目を見るのだと知った。そうすれば身体が自動的に互いのほうに近寄っていくのだという。（48 ペ）

○年齢を気にしない…ウォリー・エイモス（米国の有名な起業家）が講演を終えると、ひとりの女性が歩み寄って「もし私がこれからロースクールに行ったりしたら、卒業するときには55歳になってしまいます」と言った。エイモスはこう問い返した。「もし行かなかったら、何歳になるのですか？」（51 ペ）

○「富について学びたいなら、自分よりはるかに裕福な人たちとつき合え」と昔から言われている。…（中略）…自分よりもっと多くのものをもっている人たちを手本にしよう。あなたが成し遂げたいと思っていることを成し遂げた人を見つけ、まねしよう。（73 ペ）

○ほとんどの場合、どのような決断をするにせよ、じっと形成を見て行動を起こさずにいるよりはいい。決定を迫られたときは、状況についての情報をできるだけ多く集め、

慎重に分析し、静に座って集中し、すばやく決断をくだそう。(86 ペ)

○「自分を元気づける一番いい方法は、誰か他の人を元気づけてあげることだ」(米国の作家、マーク・トゥエインの言葉)(107 ペ)

○プラス思考を心がける…「人間の心は庭のようなものだ。頭を使ってうまく耕すこともできれば、荒れ放題にすることもできる。しかし、耕しても荒れ放題にしても、何か必ず芽を出す」(哲学者ジェームズ・アレンの言葉)

○「人間の運命は、本人の魂の中にある」(古代ギリシャの歴史家・ヘロドトスの言葉)(153 ペ)

○私たちが直面する問題は、じつは姿を変えた贈り物なのだ。どのような問題であろうと必ず贈り物が隠されている。ただし、問題を解決するまで、その贈り物は見えてこない。私たちが「問題」と呼んでいるものは、何かを教えてくれて、より高いレベルへと私たちを押し上げてくれる。だからといって、問題解決がやさしくなるわけではないのだが。

問題に直面してもストレスをあまり感じないようにするための画期的な方法は、「問題」という言葉を使わないことだ。たとえば「挑戦」のように気分がよくなる言葉を使うといい。人はみな、挑戦を好むものだ。(162 ペ)

○成功のためのおそらく最強の戦略であるのにほとんど使われていないのは、「成功者をまねる」というテクニックだ。

簡単に言えば、あなた自身が成し遂げたいと思っている結果をうまく実現した人を見つけて、その人がどういうことをしたか調べ、同じことを実行する、ということだ。もし誰かの信念、行動、戦略をまねれば、その人がおさめたのと同じような結果が得られる。(188 ペ)

○自己啓発書や自分の興味のある分野の本を読むことに時間を投資しよう。毎日 10 分ほどでいい。このシンプルな変化を起こすだけで、新しいことを学ぶために年間 60 時間ほどを使うことになる。一日わずか 10 分ほどの時間を投資することで、これだけ多くの学習が可能になるのだ。五年か十年も継続すれば、あなたはその分野の「権威」になれるだろう。…(中略)…能力開発は自分でするしかない。…(中略)…

私自身、この学習法を実践して、たいへん興味深く有益なことを学んだ。自己啓発書を読んだ日は、読まなかった日と比べて、心の姿勢がよくなって意義深い経験ができたのだ。(193 ペ)

\*

半年近く前に買って「積ん読」状態だったものが、こうして読みこなせて良かった。カーネギー著『人を動かす』によく似た、「明るさ」がある文章が良いと思った。

### ◎立川談志著・和田尚久構成『立川談志まくらコレクション』(竹書房文庫・2015年)(私物)

のけぞるほど面白い。カバーにある宣伝文をそのまま引用紹介する。

\*

立川談志に“禁句”はない！落語界の風雲児と評された天才落語家・立川談志が、“まくら”で斬った平成の事件、世相、社会問題が文庫で味わえる！古今亭志ん朝、師匠・五代目小さんの死とその意義を語り、「イリュージョン落語」を論ず。国際情勢と日本の政治家を皮肉り、アメリカ同時多発テロで「たが屋あ〜」と発し、金正日万歳と叫ぶ。落語とは、幸福とは、常識とは、社会とは、人間とは、森羅万象の本質を語る珠玉の話芸。再円熟期に語られた“人間の業”をイッキ読みする“まくら”集！

\*

最も気に入ったジョークを次に紹介。(昼間からすみません)

\*

「ねえ、ちょっと、あんた、いらっしやいよ」

『はい先輩、なんです？』

「十三号室の患者さん、オペするでしょ、盲腸の」

『はい』

「で、いま、その前に、わたし剃毛してきたのよ」

『お疲れさまでした』

「そしたらねえ、あんた、聞いてくれる」

『何です？』

「あのクランクのペニスに、彫りもんがしてあるのよ」

『えっ？』

「だから、彫りものがしてあるの」

『本当ですか？』

「嘘言ったって、しょうがない。見てらっしやいよ」

『やだあ、あたし』

「いいじゃないの，滅多に無いのよ（笑）。話に聞いたことはあるけど，本当にあるとは思わなかった。見てらっしゃいよ，いいから」

『何が彫ってあるんですか？』

「字よ。アダムって彫ってあるわよ」

『先輩，行って来ました』

「彫ってあったでしょ？」

『はい』

「アダムって彫ってあったでしょ？」

『阿姆斯特ダムって彫ってあったけど』（爆笑・拍手）

これを解するか，解さないかでもって，おれの落語を聴いていいか，悪いかってこと。わかんない方，どうぞ，立っちゃったほうがいい（笑）。眠る前に帰ってくれな（爆笑・拍手）。（74 ペ）

＊

立川談志が仮説実験的に落語を話していたことがよくわかる話もある。

＊

芸っていうのはね，言っとくが，自信があってやるんじゃないのよ。おれの考えてきたネタを，おれの技倆を，今日おれの客に通用するかしないかっていうのを試しにくるんですよ，自分が。だから，試しの対象にならない客なんかどうでもいいんですよ（笑）。試す値打ちがある，わざわざおれを聴きに來てる，その水準にあるはずの客が居眠りするから，腹立って帰って來ちゃったのよ（笑）。どうでもよけりゃあ，腹なんか立たないんですよ。（139 ペ）

＊

この本に姉妹編があることを知り，即注文。お盆明けには手に入るだろう。たのしみだ。

### ◎山本益博著『立川談志を聴け』（小学館文庫プレジデントセレクト・2017年）（私物）

著者（1948～）は落語評論家，料理評論家。本書のもとになった同名の単行本は2012年にプレジデント社より刊行されている。これは，買ってみて，初めてわかった。気にいったところを次に引用する。下線は柳沢。

○その三人（志の輔，談春，志らく）が東になっても談志師匠にかなわない，というのが正直なところで，個人のパフォーマンスをするのは料理人もおなじなんですけど，二代続かないです。親父がいいから息子がいいというのはない。志ん生がよくて，志ん朝

がいいのは、全然違うタイプだったからですね。志ん朝からは志ん生の志の字もほとんど感じられないです。僕は、志ん生のなまの高座は数回しか見てないけれど、でもテープなどで聴いたときの感じでいうと、志ん朝は違う方向に行ってますよね。おんなじところにいったら絶対にはかなわないと、本人がわかっている。

やはり談志という存在は立川談志一代で終わりで、その下にいた弟子は違うところを目指さないといけないと思うんです。(143 ペ)

○落語は「噺」とか「咄」とも呼ばれてきたが、談志師匠の高座はまさしく、「いま、はじめて思いついたようにしゃべる」「口から出まかせ」に見せる至芸だったとも言えようか。

立川談志は落語の本質がドキュメントであることを教えてくれた数少ない落語家のひとりであった。

じつは「ドキュメント立川談志」は小沢昭一さんが立案し、私がアシスタントを務めさせていただいた。落語ばかりか高座以外の音源が残されたというのは、小沢さんの慧眼があったからこそだが、ほとんどの現場に居合わせた私は、今更ながら落語家立川談志のスケールの大きさに驚き、同時代に立川談志の現場に立ち会えた幸運を噛みしめている。(210 ペ)

○それにしても、立川談志がなくなって五年。益々、その存在感の大きかったことを考える昨今である。こんな天衣無縫で無頼で融通無碍な落語家は二度と出てはこないだろう。いま改めて、立川談志と同時代に生きていたことを幸せに思わずにはいられない。(213 ペ)

\*

みごとな「弟子論」であると感じた。弟子は師匠とまったく同じ方向を目指してはならないということらしい。そりゃそうだと思う。生まれも育ちも全く同じ人間なんて双子以外にはいないはずだから。落語にせよ何にせよ、自分の持ち味を生かせる場で活躍することが大切なのだ。

また、授業も、今その場で思いついたように生徒にイキイキと話ができればいな〜と思った。

談志師の弟子であるにせよ、ないにせよ、「立川談志から何を学んで、何を学ばないか」というところにセンスが現れる」のだと思う。引用した部分の他に 1976 年から 1978 年にかけて山本氏が聴いた立川談志の高座に関するメモが面白かった。メモとはこういうふうにとるものなのか、ということがわかったし、山本氏がどういう視点で立川談志

の高座を聴いているかがよく分かった。メモの取り方の良い例として学ぶ点が多いと思う。

### ◎立川談志著『談志楽屋噺』(文春文庫・1990年)(私物)

故・立川談志(1936～2011)の語る有名無名の芸人たちに関するエピソード集。今までの談志師の本で毒に慣れてしまっているの、この本に特別強い毒は感じない。いまのところ、特に目の覚めるような話ばかりでもないように読んだ。飛ばし読み。それでも勉強法として役に立つ部分があったのでこの際、特に抜き書きして覚えておこうと思う。

＊

○謎掛けは橘家円太郎さんがやっていた。客から商売の題を貰うのだが、答えはある程度できていて、アドリブは十分の一ぐらいだったろう。

それを前座ごころに見てて、二つ目になったときに、円太郎さんの兄弟弟子で円福という、この人は万年前座、昔は年を取った前座、つまり万年前座というのがいたもので、その円福さんに教わり、いまでも覚えているが、そのネタは現代では通じない。

たとえば、「氷屋」と掛けて、「己が罪」と解く、こころは「己(みず)からつくる」とか、「乾物屋」と掛けて、「生木の薪」、そのこころは、「干したら、たこ(焚)」とか、そんな程度のものだ。「時計屋」と掛けて「大塩平八郎」と解く、そのこころは、「飢饉賊(貴金属)」、正直あんまり面白くない。なかには上手いものもある。「葬儀屋」と掛けて、「鶯」と解く、こころは「泣き泣き(啼き啼き)埋めに(梅)いく」とかね。そういう答えができていたのを五十種類ぐらい教わってきて、その頃は親の家の三畳間に寝てたから、これらを天井に書いておき、それをのべつ下から仰いで眺めてる。

そのうちに商売屋だけでなく、森羅万象、何でもできるようになった。そのかわり、その頃は明けても暮れても同音異義語ばかり考えていた。たとえば、「かんじょう」という言葉が浮かぶと、人間の感情、環状線、勘定と覚えておき、山手線という題が来れば、「ケチな奴と飲みに行った時」と解く。そのこころは「環状線(勘定せん)」とやり、逆にケチな奴という題が出たら山手線と解いて、これまた「かんじょうせん」とやる。

バカバカしくて受けようとすれば、山手線と掛けて、そこにあったカンビールと自分のポケットから出した部屋の鍵、千円札を出して見せる。

なんだ、それは、とお客が怒鳴る。

「つまり、こころは、カン・錠・千」てなこともやる。

動詞がやさしいのは当たり前で、これなら何でも出来る。例えば、「かける」という動詞は、「賭ける」「駆ける」「掛ける」、発音は違うが「欠ける」でもかまわない。「マラソ

ン」と題が出れば即座に「ハンガー」、そのところは「どちらもかける」とこうなるが、そこはプロだ、一味違う。「マラソン」との客の題に「折れたハンガー」と解く、ところは「下手にかけると破れることがある」。加えていま言った熟語、または動詞と熟語の組み合わせをやる。茹（う）で上がる……腕上がる、ああ、そうか、「ほうれん草」と掛けて「稽古事」と解く、そのところは「茹で（腕）上がると食える」とか、のべつそういうことを考えていた。

だから、いま円蔵や小益のやっている謎掛けは、同音異義語じゃないから謎掛けになっていない。たとえば、「編集長と掛けて」「学校の先生と解く」、そのところは「本で苦しむ」。当たり前だ。よくいうよ。そういうのやっているんだが、バカだからしょうがない。本当はちゃんとした同音異義語、それも鮮やかじゃなくちゃいけない。(45 ペ)

\*

この話は、当たり前だが、「面白いことをやる時には、基礎になることを暗記していつでも使える状態にしておくことが必要だ」、「プロらしいことをやろうと思ったら、面白いことを組み合わせ、相手を唸らせることが大切だ」ということを教えてくれていると思う。

他にも面白い部分があるにはあるのだが、基準に達しなかったので特にここには写さない。全編が古き良き時代の楽屋話である。またほかの時期に読み返せば、印象に残る部分が変わってくるのかもしれない。今回はここまでとする。

### ◎読売新聞世論調査部編『USO 放送—世相を斬る三行の風刺—』(中公文庫・2014 年)

川柳の次に興味を持ったのは、投書欄にある「三行コント」。鋭く世相を風刺した、ユーモア溢れる寸言。数回、投稿を試みたが、力不足を感じたので少し本格的に「勉強」してみることにした。アマゾンの検索でヒットしたのがこの本。読売新聞の三行コント欄「USO 放送」から過去 20 年間にわたる期間の傑作が厳選されている。政治、経済、国際、社会、スポーツ、文化・芸能の 6 分野に分類されている。合計 4ε0 作品が一冊に収められている。

作品の例を三つほどまとめて次に紹介する。

「**続投**」／やっぱり投げた！／——国民／（東京・酢豆腐）／2007 年 9 月 16 日掲載／安倍首相が 9 月 12 日、退陣を表明しました。7 月の参院選で自民党が惨敗した後も続投していただけない、国民は突然の退陣に驚きました。表明の翌日、安倍首相は入院。約 10 日後に病院で記者会見し、体調悪化が退陣理由だと明らかにしました。この 5 年余り後に首相に復帰するとは、本人も想像できなかったことでしょう。(48 ペ)

「**埋める**」**伝統**／昔一兵馬俑／今一車両／—中国／（東京・サクラ）／2011 年 7 月 28 日掲載／中国の浙江省で 7 月 23 日、高速鉄道が追突、脱線して 40 人が死亡、約 200

人が負傷しました。中国当局は、事故車両を現場近くに掘った穴に埋めたため、「証拠隠滅」との批判が相次ぎました。秦の始皇帝陵の「兵馬俑」遺跡は長い年月をへた後に発掘されましたが、高速鉄道は険しい批判に配慮したのか、数日後に掘り返されました。

「**光を超える素粒子**」／はやい話が／よくわからない／——凡人／（埼玉・破魔矢）／  
2011年9月27日掲載／解説 名古屋大などの国際研究グループは9月23日、素粒子の一種であるニュートリノが、光より速く飛んでいるとする観測結果を発表しました。事実なら、現代物理学の基礎であるアインシュタインの特殊相対性理論を覆すと大騒ぎになりました。約八か月後、実験にミスがあったとして発表は撤回され、期待は一気にしぼみました。（194 ペ）

＊

「三行コント」の担当部署が「世論調査部」というのはなかなかエグイ。投書の数の増減で世論の動向を読んだりすることもあるのであろう。

①通勤時などにこの本をなるべく「速読」して、作品群の背景にある世論をチクリと風刺する発想法と語法を身につける。②いいところを真似する。③信毎の「やまびこ」欄に投稿してみる。この方法でためてみたいと思っている。「質」の背景に「量」があるはずだとにらんでいる。没になることを恐れず、果敢に挑戦して、たくさん作品を作ってみることが大切だと思う。何かの記事で読んだ記憶があるが、「三行コント」欄の「倍率」は相当高いとのことだ。さて、過去の作品からきちんと学ぶことが出来るだろうか。これもひとつの実験である。

### ◎中野雄著「ストラディヴァリとガールネリーヴァイオリン千年の夢―」（文春新書・2017年）

発行日は本年7月20日、最新刊である。著者は1931年、長野県松本市生まれ。8月8日（火）の国会見学研修旅行の移動バスの中で読破。とても面白い。プロローグからしてただならぬ気迫が感じられる力作である。気になった部分を次に引用。

＊

○音楽家は、自分の持っている楽器の性能を超える演奏をすることが出来ない。（3 ペ）

○岩城宏之は、その著書の中で「指揮者には、なるヤツだけがなれる。指揮者になれないヤツは、なれない」という名言を披露しているが（『指揮のおけいこ』文春文庫）、これはメンタルの領域における個体差を語った言葉である。指揮者としてオーケストラというプロの音楽家集団の前に立ち、彼等に自分の音楽を演奏させようとするのに必要な第一の才能は「統率力」という得体の知れない代物である。身振りや手振り、或いは眼光で、他人を自分の意思に従わせるという芸当は「生得の資質であって、後天的に身に

着けられるものではない」と、岩城宏之は自らの経験則を踏まえて語りたかったのだと思う。(4 ペ)

○ヴァイオリンを作る、ピアノを作るといっても、どんな音のする、どのような音楽表現力を持つ楽器を作るのかというのは製作者の目的意識と、彼または彼女の製作能力による。だが、「目的意識」とか「製作能力」というのは、極めて不可解かつ説明困難な人体現象なのである。果たして言葉や文章によって解明が可能なものか否か。(5 ペ)

○繰り返しになるが、ヴァイオリンという楽器の価値を決めるのは、製作者によって楽器本体に埋めこまれた「音楽表現能力」である。

埋めこまれた音楽表現能力は人体における遺伝子=DNAと同じであって、後世に生きる人の意志や努力によって変えられるものではない。全世界に同じ人間が二人としないように、楽器の持つ音楽能力は一つひとつが異なる。同じものは一つもない。だから音楽家は、その唯一無二のものを欲しがらる。

そして、ヴァイオリンのなかの銘器は、古今の芸術家の作品と同じように、限られた歴史上の才能によってこの世に産み出されたものであって、作品を産み出す才能自体が人類の歴史上、限定されたものと考えられる。例えば画家であれば、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、フェルメール。作曲家であれば、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン。

それらの芸術家の名前と作品だけが、何故何百年という歴史の風雪を越えて生き残ったのか—人類にとって「普遍的な芸術価値」とはいったい何なのか。こと芸術論の神髄を語るのが本書の目的ではないが、ヴァイオリンという楽器については、常に古今の芸術作品と、その創作の秘密について思いを致さなければ、市場で取引されている途轍もない価格について理解することはできない。さらに厄介なのは、この芸術作品—じつは音楽を演奏する「道具」に過ぎないことなのである。(11 ペ)

○手にした楽器が、奏者の意図したような音楽を奏でてくれないという現象が、大変残念なことではあるが、しばしば起こるのである。もちろん演奏技術の未熟という根本問題に起因することもあるが……。

原因は三つある。

その第一は楽器自体の性能である。

造りが悪い楽器は、いかに名手が奏でたとしても、格別に良い音がするわけではなく、音楽の表現力も乏しい。自動車レースに譬えれば、乗っているのがエンジンの排気量の

少ない軽自動車だったら、いかなる名ドライバーでも、F1のレースには勝てない。厳しいようであるが、それが現実である。

第二は、経年変化と初期の弾き込みである。

新しい木材は大量の水分を含んでいるので当然鳴りは悪いが、伐採後数十年の歳月を経た木材を用いて製作した楽器でも、完成後ある程度の日時を経ないと、十分な音楽的表現力は発揮できない。特に必要なのは正確な音程と正しい運弓の技術を持ったプロのヴァイオリニストによる弾き込みである。一流の演奏家によって一定時間以上弾き込まれないと、楽器は良い音を出してくれない。

正確な音程と正しい運弓によって毎日何時間か弾かれた楽器は、楽器の構成要素である木材のどこかの部分が、特定の楽音に対して一種の共鳴現象を起こすのであろう。次第に豊かで、色彩的な楽音を発するようになる。いわゆる「表現力」が増すのである。

弾くのを止めてしまいこむと、楽器の音は生気を無くす。「眠ってしまう」とか「死ぬ」とか専門家はいうが、楽器は弾かれなくなると長患いの病人のように迫力を失ってしまう。下手な人が弾くと、弾かれる音程がバラバラで、構成する材木が不規則に振動させられるからであろう、また、右手の運弓が未熟で、楽器の振動が滑らかさを欠くからでもあろう、楽器の「鳴り」が悪くなり、ひどい場合には雑音が増したりする。

ヴァイオリン属といわれる擦弦楽器は、組み立てられて時間が経つほど演奏者の表現意欲への反応＝レスポンスが飛躍的に上昇する。

第三は、楽器と演奏者の性格との関係＝くだけた言い方をすれば「相性」の存在である。…（中略）…

小林秀雄の遺した一連の音楽談義の録音テープのなかに「名ヴァイオリニストといっても、結局のところ二通りに分かれるんですね。ストラディヴァリウスを巧く鳴らす人と、ガールネリウスを上手に弾く人ってわけです」といった感じの言葉があって、聴いたときの印象が強烈に私の脳裏に刻まれている。…（中略）…

いまにして思えば、これは「卓見！」であった。(32 ペ)

○〔グアダニーニの時代、私はその楽器から自分の「理想とする音」を出そうと、必死に試みていた。しかし、ストラディヴァリウスを弾きだした途端、私の楽器に対する考え方はすっかり変わってしまったのである。

ストラディヴァリウスという楽器のもつ音楽の表現力は、当時の私の表現能力をはるかに超えていた。

「この曲を、このように弾こう」と思って、或る日、楽器を手にする。

すると、そのストラディヴァリウスが奏でる「音楽」の中で、楽器は、

「この曲には、もっと違った解釈の仕方がある。こんな音も出すことができる。もっと大きな表現の可能性だって考えられる」

と、語りかけてくる。

私自身は必死に楽器の語りかけについていく。私が音色をイメージする前に、楽器が様々な色彩を奏でるからである。

練習の時間が、楽器との対話の時間になり、作品に内在する音楽的内容を再発見する貴重な瞬間となる。このような経験は、ストラディヴァリウスに出会うまで、創造したこともなかった] (諏訪内晶子著『自伝・ヴァイオリンと翔る』・NHK 出版)

銘器を手にとり、自分のものにするということがどういうことであるのか—じつに明快に語られた文章だと思う。(34 ペ)

○英語でスプルース、ドイツ語でフィヒテと呼ばれている唐檜は、ヴァイオリンの表板だけでなく、弦の振動を受け入れる楽器—例えばギター、マンドリン、ピアノ、ハープなどにも、ほぼ 100 パーセント使用されている。更にいまは半分博物館入りをしている古楽器=リュートやガンバなどの表板に使われている木材も唐檜である。ちなみに、ピアノに使われている唐檜は、張られた弦の響きを反響し打鍵音を楽音に変換させる、外側からは見るできない響板の最重要素材である。

だから、西欧に誕生したクラシック音楽の中核を形成する弦楽器群とピアノ(ピアノ・フォルテ)の心臓部は、「唐檜」と呼ばれるマツ科の材木であると言い切って差し支えない。(80 ペ)

○[人間が種を播いて育て、山へ移植した木はあきませんわ。(中略)自然の中で競争せず、温室のように育ったのはあきませんのや] (西岡常一著『木のいのち木のこころ』・草思社) (83 ペ)

○パガニーニは音楽史上別格の鬼才である。…(中略)…彼はアマティ、ストラディヴァリ、ガアルネリといった歴代の銘器の製作者たちが夢想だにしていなかったであろうヴァイオリンという楽器の持つ音楽表現能力を、一代で開発し尽くしてしまった。左手のピッツィカート(それも上行・下行の音型に対して)、二重音のフラジョレット(笛音)、四オクターヴにも及ぶ急速な運指と十度という幅広い音程の重音奏法、四本の弦にまたがるアルペッジョなど、それまで誰も試みなかったような超絶技巧を自作のなかに取り入れて聴衆を煙に巻いた。加うるに、心を融かすような甘美な旋律。

ときあたかも貴族社会の崩壊期と市民社会の勃興期に遭遇していた。彼は爛熟期の貴

族達の寵愛を受け、豊かになりつつあった新興の市民階級からも拍手をもって迎えられて、ウィーン、ベルリン、パリ、ワルシャワなど各地に新設されたコンサート会場を満杯にし続ける。…（中略）…ロマン派時代幕開けの立役者はやはりパガニーニであった。

（140 ペ）

○楽器の価格が日本円換算で数億円以上という水準まで高騰してしまった現在、いかなる人気ヴァイオリニストといえども、上質のストラディヴァリウスとガアルネリ・デル・ジェスの双方を所有し、弾き分けるなどという贅沢はできない。とにかく、今はそういう時代なのである。（147 ペ）

○1744年の10月、ジュゼッペ・ガアルネリ・デル・ジェスは天に召された。アントニオ・ストラディヴァリがこの世に生を享けたのが1644年であったとすると、ちょうど100年後のことであった。大先達であるニコロ・アマティが活躍していた時代を含め、この100年間で、ヴァイオリンという神秘的な創造物が最高の輝きを放ちながらこの世に誕生した、「夢のような一世紀」ということになる。

とにかく、ガアルネリ・デル・ジェスという希代の職人が1744年10月に亡くなり、亡骸がその月の17日にサン・プロスペロ教会に埋葬された翌日から、人類はこの人達が作ったものより優れた楽器を一挺も作り出せないでいるのである。（147 ペ）

○〔先日、諏訪根自子の演奏をきいて大変面白かった。感動した。そして色々な事が考えられたよ。よくあれまでやったものだ。まるでヴァイオリンの犠牲者といったような顔つきをしている。（中略）あの人から楽器を取り上げたら何が残るかね。（中略）あの方は、自分の人間性をこれから回復しなければならんところにいる、しかも日本ではそれが恐らくできないよ。（中略）ともかくあの方の演奏には西洋文化にぶつかった日本文化の象徴的な意味合いがある〕

小林は続ける。

〔だがあのヴァイオリンは偽物だと思うね、ストラディバリウスからあんな固い音が出てくるわけがない。腕が悪いとは思えぬ。十八世紀のヴァイオリンの音は少しも出ていない。イミテーションを貰ったと思う。新しい木の音だ、可哀そうな楽器だよ〕（小林秀雄・横光利一『直観を磨くもの』新潮文庫）

〔「あのヴァイオリンは、贗物でした。ただ、それがわかったのはつい近年のことで、姉はそれを知らずに、ストラディヴァリウスと信じたまま、亡くなりました〕（妹・諏訪晶子の言葉『諏訪根自子』アルファベータ）

小林秀雄という人物の知的鑑識眼の凄さについて、語る言葉はない。(179 ペ)

○演奏とは、「聴き手の持つ時間の意味を変える行為」である。人は、或る特定の時間を、自分で好きなように選べる権利を持つ。… (中略) …コンサート鑑賞というのも、その人にとっては、二度と繰り返すことのない、人生の或る時間の「生き方」の選択である。自らの人生の時間を割き、命の次に大切なお金を支払う一行為の対価は感動、他の何かからも得ることのできない感動である。もしそのコンサートで、「ああこの時間、ここで過ごせてよかった」という気持ちを聴き手に持ち帰らせることができれば、そのコンサートは成功、何の印象も残せずに聴き手を帰せば、或いは「来て損をした。金と時間の無駄使いだった」という印象を与えてしまったら、そのコンサートは失敗である。… (中略) …

不特定多数の聴き手をコンサート会場に集め、ステージで音楽を奏でて高額の入収入を得るプロセスとは、こういうものなのである。そして「聴き手の持つ時間の意味を変えられるか否か」の差はじつに微妙で、その理由のほぼ半分が、演奏する楽器の質とグレードに起因するものと考えていい。(204 ペ)

○悲しいことであるが、私の周辺にも、ストラディヴァリウスのヴァイオリンを持ち主に返却したとたんに、華やかなコンサートのチラシから名前の消えた音楽家が一人ならずいる。コンサートを開いても、会場が盛り上がり、次にはチケットが売れなくなる。「楽器の違いなんです。以前、ホールの客席に充満していたあの熱気が、私のヴァイオリンでは再現できません」。その一人は私に告白した。(205 ペ)

○「或る時代の最先端に行くメディアには“時の才能”が集まるんですよ。必ずしもその仕事向きとは限らない。とにかく良く出来る人。何をやらせても一流の仕事をしてしまう人という意味です。もちろん、何をやらせてもといっても、政治、経済、文化、軍事、それぞれの分野に大別された中での話ですがね」

このとき丸山眞男は、1920年代から50年代は映画というメディアが時代の最先端に行く商業分野であり、新しい芸術分野であったと語った。監督、俳優、脚本家(シナリオライター)をはじめ、衣装のデザイナーや美術関係者、作曲家まで—この分野に集まった“時代の才能”によって、不滅の名作が誕生する。… (中略) …人間性の本質を語り、しかも詩情溢れる画面を創造した大監督や名優たち—画面を観れば、彼等の生きていた時代が、歴史書を読むより明瞭に観客の心に刻まれる。要するに、“時代”が彼等のような人物で代表されているのだと、丸山は説明した。そして、音楽の分野でいえば、

ハイドンやモーツァルトの作品が貴族社会の斜陽化一步前の爛熟の象徴、ベートーヴェンの音楽が、貴族社会から市民社会への移行期＝激変期を象徴するようなものと付け加えた。

更に彼は、「君のいたレコードとオーディオの世界も、時代の最先端のメディアだった時代があるでしょう」と言葉を継いだ。…（中略）…

丸山眞男は、そんな企業の創始者たちを“時代の才能”という一語で表現した。そして、そんな人たちと同じ業界で競い、後を追って経営者生活を送れた私の四半世紀の人生を、「幸せな二十五年間と思え。もって瞑すべし」と評したのである。（237 ペ）

○時代が移り、産業革命が浸透し、商工業が盛んになって、市民文化が栄え、貴族社会が没落して、宮廷楽団などからの高額な楽器に対する需要が途絶えると、超一流の才能や技能の持ち主が楽器製作の世界に集まらなくなる。職業の多様化が齎す才能の分散現象である。ヴァイオリンなど、擦弦楽器製作の世界に限っていえば、超一流の才能の涸渇と考えるほかない。（240 ペ）

○現代の名工・岩田立氏はかつて私に、「ヴァイオリン作りという仕事に、途方もない夢が無くなったんですね。もしいま、ビル・ゲイツのような大金持ちが、自分が気に入るようなヴァイオリンを作ってくれたら一億円払うとか、五億円で買うとか言ったら、ストラディヴァリかデル・ジェス級の才能の持ち主がわれわれの業界に出現するかもしれません。いまは、昔の王侯・貴族のような製品の買い手がいません。われわれにはインセンティブが欠けているんです」と語ったことがある。そしてさらに、「いまの世の中、刺戟が多すぎます。雑音や楽しみごとが多くて、ストラディヴァリのように、陽が出てから夜が更けるまで工房に籠りきりなどという生活はできにくくなっています。集中力の欠如は、間違いなく製品の品質に影響します」と断言した。（240 ペ）

○〔木材自体の選び方も重要でしょう。アマティやストラディヴァリは、板の処理技術の素晴らしさ以前に、木を見る能力にも長けていたのだと思います〕（佐藤輝彦著『“本物”を見極める』ヤマハミュージックメディア）（242 ペ）

○本書の担当編集長と言葉を交わしたなかで、いま密かなブームとなっている日本刀に関する話題があった。

数ある名刀のなかで、最もその名が知られている「正宗」。鎌倉時代末期から南北朝時代に活動した五郎入道正宗（推定 1264～1343）の鍛え上げた日本刀は、平安時代の名

工たちと並んで、こと“気品”といわれる一点において他の時代の追随を許さず、その特色だけは、後世の刀鍛冶、現代科学をもってしても再現不可能だという。刀工・正宗の心眼、人格の為せる業であろうか。楽聖・モーツァルトの作品にも、独特の気品がある。特色は旋律の美しさ、和声進行の非凡さ、曲の構成能力の高さに留まらない。貴族社会のなかに生き、貴族を主たる客層として曲を書いたという歴史的な事情が背景にある。(246 ペ)

○丸山眞男はかつて私に、「私は民主主義者であるが、こと“文化”に関していえば、貴族制社会が衰亡し、民主主義が世の中に浸透すればするほど、“気品”とか“高貴”という言葉が忘れられていくと思うよ。これは、階級制度からの脱却と、職業選択の自由を手に入れるために、人類が払わなければならない代償かもしれないね」と語ったことがある。

ストラディヴァリもモーツァルトも、生きた年代は異なるかもしれないけれど、同じ時代の枠組みのなかで活躍した“時の才能”であった。二人の作品が持っている最大の共通点は高貴で気品に満ちた雰囲気なのである。(246 ペ)

○製作者や修復工、使用する音楽家や蒐集し保存するコレクターがそのことを自覚し、細心の注意を払って楽器を扱えば、ストラディヴァリウスやガアルネリ・デル・ジェスのような銘器は、これからも数百年間、人類に喜びと慰め、そして生き甲斐を与える存在であり続けてくれるに違いない。(250 ペ)

\*

骨董蒐集などで審美眼を磨いたといわれる小林秀雄氏の話、西岡常一氏の木の話、刀剣の話、丸山眞男氏の人材論など興味深い話題が満載で、とても面白い本だった。東京までのバスの移動時間で退屈することがなく、快適な環境で読めて良かった。

コンサートと同じく、私の授業でも、生徒たちに「この（あのときの）授業の場にいることができて良かった」と思ってもらえる授業にしたいものだと思った（生徒全員にこう思ってもらおうとは思っていない。全員がそう思うよりも、むしろ反発する生徒がいるくらいの方がいいと思う。賛否両論あったりしたら、かえって面白いかもしれない）。

また、本を読むときにも「この本を読んでよかった」という感想がいつも持てるようにできれば素晴らしい。さらに、研究会などに参加するときも「このレポートを読んで良かった」、「この発表を聴いてよかった」と思い、思われるような時間の過ごし方ができれば最高だと思う。ひとことで言えば「良い出会いが大切だ」ということになろうか。

この本は文章が流麗であり、美しいと思った。打っても売ってもなかなか打ち終わら

ない。思ったよりも共感した部分がたくさんあったということであろう。

#### ◇次回以降の予告

- ◎ローレンス・A・カニングラム著／長尾慎太郎監修『バフェットからの手紙（第4版）』（Pan Rolling 株式会社・2016年）（私物）
- ◎松竹伸幸著『対米従属の謎』（平凡社新書・2017年）（私物）
- ◎森田敦史著『なにもしていないのに調子がいい』（クロスメディア・パブリッシング・2016年）（私物）
- ◎島地勝彦著『神々にえこひいきされた男たち』（講談社＋α文庫・2017年）（私物）
- ◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』（仮説社・1987年）（私物）
- ◎<sup>たくきよしみつ</sup>鐸木能光著『シンプルに使うパソコン術』（講談社ブルーバックス・2007年）（私物）
- ◎八代目桂文楽著『芸談あばからべっそん』（ちくま文庫・1992年）（私物）
- ◎星新一著『気まぐれ指数』（新潮文庫・1973年）（私物）
- ◎<sup>かつべみたけ</sup>勝部真長著『上に立つ者の論理』（PHP文庫・1994年）（私物）
- ◎山本七平編『帝王学―「貞観政要」の読み方』（日経ビジネス文庫・2001年）（私物）
- ◎<sup>ごきょう</sup>呉兢著・守屋洋訳『貞観政要』（ちくま学芸文庫・2015年）（私物）
- ◎出口治明著『座右の書「貞観政要」』（KADOKAWA・2017年）（私物）
- ◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（日経BPクラシックス・2010年）（私物）
- ◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』（光文社新書・2011年）（私物）
- ◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』（平凡社ライブラリー・2017年）（私物）
- ◎<sup>やまだつよし</sup>山田剛史・<sup>はやしはじむ</sup>林創著『大学生のためのリサーチリテラシー入門』（ミネルヴァ書房・2011年）（私物）
- ◎西鋭夫著『國破れてマッカーサー』（中公文庫・2005年）（私物）
- ◎アレックス・ラインハート著・西原史暁訳『ダメな統計学―悲惨なほど完全なる手引き書―』（勁草書房・2017年）（私物）
- ◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』（河出書房新社・2013年）（私物）
- ◎松尾英明著『ピンチがチャンスになる「切り返し」の技術』（明治図書・2016年）（私物）
- ◎ジェームズ・ヒュームズ編・長谷川喜美編訳『チャーチル 150 の言葉』（ディスカヴァー・2013年）（私物）

◎山田正次著『アメリカに振り回される日本の貿易政策』（日本経済評論社・2017年）  
（私物）

◎新津<sup>あらお</sup>新生著『蚕糸王国長野県—日本の近代化を支えた養蚕・蚕種・製糸—』（川辺書林・2017年）（私物）

◎小室直樹著『日本人のための宗教原論』（徳間書店・2000年初版・2015年20刷）

### ◇まとめ・つぶやきなど

○8月のサークル例会は26日（土）の予定とのこと。慣例により、8月号入力締め切り、印刷製本を18日（金）に設定。お盆明けの学校はまだ静かなはずで、たぶん仕事もはかどることだろう。分量によっては前倒しすることも視野に入れておく。〔7月13日（木）理化部活動終了後17:30メモ〕

○化学研究室の個人ロッカーにしまってあった未読の本をごっそり持ち出し、「8月号」の「次回以降の予告」スペースにタイトルなどを入力。読んでいないのだが、タイトル等を入力したことで大仕事をした気分。なかなかいい本が揃っている。これだけあれば、夏休みに暇をもてあますことはないだろう。読書（やメモづくり）が目的で通勤できるなんて最高だ。夏休みが楽しみだ。〔7月14日（金）10:50メモ〕

○昨日、今日と石けんづくりおよびエステル化の生徒実験日。修学旅行で旅行会社の人たちが張り切っているように見えたのは、トラブルなどへの対応のとき（宿泊先の急遽変更、病人が出たときの医療手配、天候不良による交通手段の変更等）だった。化学実験も何事もなく進んだときよりも、生徒がトラブルを起こしたときの方が「やりがい」が感じられる気がする（もちろん、何事もない方がいいに決まっていますが…）。できるだけ、時間内にとれる最善の策で、生徒の実験結果が理想的な状態に近づくように手段を選んで必要な策を講じてゆくことに「教師の腕の見せどころ」があるのかも知れない。ただし、その前に「安全第一」である。〔7月14日（金）15:15〕

○今朝の信毎に川柳が掲載された。〔でも君は「こんな人たち」の代表〕。評者、石田一郎さんより「確かにとと思うところが面白い」と五七五で遊び心溢れるコメントを頂く。嬉しい。〔7月19日（水）9:50メモ〕

○空き時間に川柳を思いつく。引き出しに常備してあるハガキに書いて投函。「泥縄で〔身体検査〕甘くなる」、「骨格を変えぬ改造見かけだけ」、「外遊へホテルジムへと逃げ回る」〔7月19日（水）10:20メモ〕

○昨晚、夕食後に川柳を思いついたので、ハガキに書いて今朝、投函。テーマはサマージャンボ宝くじ。「三千で三百円と夢を買う」。〔7月20日（木）7:50メモ〕

○川柳が止まらない。通勤電車の中で考え、手帳にスケッチのメモ。篠ノ井駅で降りて

歩きながらまた考えた。学校に到着して「大臣は容姿いちばん大事なの」、「もう辞めるからいいでしょう見過ごして」をスケッチにメモ。テーマは稲田防衛大臣。どうも、最近の「防衛大臣」というのは「防衛の責任を持つ大臣」という意味ではなくて、「防衛してあげなければいけない大臣」という意味らしい(笑)。このことを川柳に落とし込もうとしてみたが、無理だったので、「攻める方向」＝「作風」を変えてみた。ハガキに書いて投函。〔7月20日(木) 10:30 メモ〕

○「川柳がどんどん出来て止まらない」(どういうわけか、これも川柳)(狂歌)。15年くらい前に妻から聞いたお年寄りのエピソードを思い出して次の句を作ってみた。一字多いが、ちょっと笑える…かも。「きょう具合悪くて通院休みます」。帰りに葉書を投函しよう。〔7月20日(木) 15:00 メモ〕

○川柳が信毎で二度掲載されたことを喜びすぎてはいけないと思った。20日、御嶽海に関する次の記事を読んだため。「幕内自己最速タイの早さで勝ち越しを決めた新関脇場所。御嶽海は福島中時代に学んだ精神面の大切さを何度も思い返している。〔例えば、勝っても1度目は『まぐれ』、2度目も『偶然』の要素があり、3度目でようやく『実力』と認めていい、と教わってきた〕。だから、白鵬に土俵で初めて勝っても気持ちは緩まない。「自分はいつも挑戦者なので」と言える理由の根拠だ。〕できるだけ早く「三度目」が来るように、目指すことにする。〔7月20日(木) 信濃毎日新聞朝刊より・下線は柳沢〕

○今日の川柳。「大臣の地位に恋々しがみつく」、「長官は一方向的に話すだけ」、「もう来年のランドセル予約する」今週はとてまたたくさん葉書を書いたので、きょうは一応ハガキに書いておき、来週、投函することにする。〔7月21日(金) 13:30 メモ〕

○ネットで検索しているときに偶然見つけたジョーク。2015年、島地勝彦氏による作品。

墜落しかけている飛行機に5人の客が乗っていた。パラシュートは4つしかない。最初の男が「わたしは安倍晋三だ。国民のためにどうしても死ねない」と言ってパラシュートを持って飛び降りた。次は女。「わたしはヒラリー・クリントン。アメリカの国民がわたしを待っている」。次もアメリカ人で、その男はこう言った。「わたしは元アメリカ大統領のブッシュで、世界一頭がいい男だ。申し訳ないが使わせてもらうよ」。4番目はローマ法王だった。ふと見ると、かわいい少女が残っている。さすがはローマ法王、「わたしは未来のない老人だ。未来のあるあなたが使いなさい」とパラシュートを渡すが、少女はけろっとして言った。「法王様、パラシュートは2つありますから大丈夫です。さっき世界一頭がいい人がわたしのリュックサックを持って飛び降りていきました」――

(<https://www.pen-online.jp/news/info/mizunouewoaruku/>)〔7月23日(日) 9:00 メモ〕

○川柳ができた。「大臣の防衛それは任務外」、「ポンコツを改造するは博打なり」、添え書き「泉流が流れ出しては止まらない」。ハガキに書いてジムの前にあるポストに。〔7

月 23 日 (日) 16:00 メモ]

○川柳またできた。「ジムへ行きこっそり腹を診てもらおう」、「大臣の資質は国家機密です」、「『戦略』の正体見たり依怙臆負」、「首都に次ぎ杜の都からも狼煙<sup>のろし</sup>」、「梅雨明けて雨降る理不尽政治も」ハガキ 2 枚に書いて投函。[7 月 24 日 (月) 8:00 メモ]

○川柳またまたできた。「情報の公開じつは非公開」、「庶民は用済みのメモをすぐ捨てる」(後者は手直し必要か、あとで)。まだ投函しない。[7 月 24 日 (月) 9:08 メモ]

○財布の中にたまったメモをここにデジタル化して整理しておく。

①晩年の立川談志は古典落語を 21 世紀用にアレンジして演じていた。その形成方法は仮説実験的だった。我々が授業書で授業するときもこうした工夫をしてはいけないと誰が言えようか。現に授業書《光と虫めがね》の内容は 20 世紀的であり、21 世紀の現在、改訂またはアレンジを要する部分が存在しているように読める。改訂で一番大切なのは、「センス」だと思う。「授業書と授業者」との関係は「演目と噺家」あるいは「曲と演奏家」の関係に相似しているように見える。竹内三郎さんが仮説関係の催しで好んで落語を取り上げる背景には、このことがあると考えるのは邪推か。

②誰にとっても今日の時点で今日が人生最後の日。誰にとっても今が人生最後の瞬間。こういうことが考えられるのは人間だけ。

③川柳「花火より浴衣を見たい夏祭り」。

④安倍晋三氏。手段と目的が倒錯しているのではないか。改憲は手段であって目的ではないはず。「《もしも私が一般の国民だったら》という視点の欠落」は問題だ。

⑤式によって場はもたらされる。物理学。学校行事。

⑥20XX 年 Y 月 Z 日、新聞横書きへ。すでに讀賣新聞および週末の日本経済新聞のタイトル・ロゴは横書きになっている。信濃毎日新聞の子ども向けページはほとんどの記事が横書き。信学会の機関誌『飛翔』は数年前から完全横書きに移行した。誰のための横書きなのか。

⑦篠ノ井で晩年を過ごした書道の大家、川村驥山<sup>きざん</sup>の幼年時(6 歳頃)の傑作「大丈夫」は題材としてとても「よい言葉」だと思った。画数が少ない。だんだん難易度が上がる。字形は似ているが意味が異なり、組み合わせると良い意味になる言葉。…こうした組み合わせは多くない。驥山の晩年の万座旅行は書家としての修行の一環だったのではないか。

⑧坂城町勤労者福祉センターのジムで会った武井さん(仮名)が言ったこと。「クラス集団と上手く付き合うコツは、『目立たない子を味方につけること』だ。生徒たちは教師をととてもよく観察している。同様に、部下は上司のことをととてもよく観察しているものだ。柳沢さん、目立つ子、優等生ばかり可愛がると、総スカンを食らうことがあるから気を

つけて…」地元の会社の労組役員を務めて苦勞した経験などから得られた教訓らしい。  
(7月31日追記、この説によれば、安倍首相は稲田防衛相を可愛がりすぎた担任に喩えられるであろう。明かな失策である。「勝負勘」が鈍っている)

⑨かつての人気時代劇「必殺シリーズ」の「殺し」は「ただの殺人」ではなく「天誅<sup>てんちゅう</sup>」であった。「殺し」の瞬間、仕事人は立法・司法・行政の頂点に立つ。または、立法・司法・行政を超越した絶対的存在となる。ただし、人が神となることは許されないので、仕事人たちは畳の上では死ねないことを覚悟している。後期必殺シリーズの「ワン・パターン」を見て私が連想するのは、力道山を代表とするプロレスの試合展開(勸善懲悪)である。そういえば、力道山の最期もまた理不尽で悲劇的であった。〔7月24日(月)午後メモ〕

○朝、ポストに三行コント「やまびこ」の案を投函。「浅川ダム完成 “脱ダム”ではなく“脱けダム”です——阿部知事」というもの。ダムの構造と脱ダムを絡めたものだが、どうだろうか。今週の信毎柳壇には残念ながら入選できず。懲りずに応募するつもり。朝、通勤途中にあるコンビニではがき10枚買う。きょうは終業式。空き時間は断続的に内田樹著『日本の覚醒のために』の書評に取り組み完成させる。〔7月25日(火)17:48メモ〕

○書き溜めた川柳三句ハガキに書いて投函準備。「情報の公開じつは非公開」,「花火より浴衣を見たい夏祭り」,「核心に触れる答弁早口に」。いずれもやや小ぶりか。このあと篠ノ井高校の暑気払いへ移動する。〔7月25日(火)18:00メモ〕

○昨日のハガキが雨で濡れてにじんだため、投函せず。新たに「暑気払いあるを尽くした飲み放題」を追加して二枚に書き直して投函する。次いで「矛盾出て辻褃合わせまた矛盾」を思いつき、葉書に書いておく。〔7月26日(水)9:05メモ〕

○26日(水)夕方に川柳ができる。朝日新聞はメールで受けつけていることが判ったので投稿。テーマは暴言幹事長にさりげなく引退勧告。「もう感謝状あげるから二階さん」。〔7月27日(木)8:35メモ〕

○朝の通勤電車の中で作句。「お呼びでない女たち気づくのが遅い」(稲田氏, 蓮舫氏), 「予定より早い稲刈り嵐来る」(稲田氏)。三句そろったので投函する。〔7月28日(金)9:50メモ〕

○7月28日(金)16:15 現在43ページ。

○7月29日(土), 30日(日)は森林の草刈り作業。作業中, 山崎Aさんが私に指示を出した。直後に山崎Bさんが私にこれと矛盾する指示を出した。私は「板挟み」だ。これを「ヤマザキのサンドイッチ」状態と呼ぶ。本物と違ってこちらは全く美味しくない(苦笑)。話が180°違うのはまだ楽だ。なぜなら, ベクトルの考え方は必要ないからだ。

話は数直線上で解決する。要するに、一次元だ。一番戸惑うのは二つの話が 90°ぐらい食い違っているときだと思う。こういう場合はベクトルの考え方が必要になる。各種交渉事にもこういう要素がありそうだ。以上のまとめ川柳、「数学は森林作業の役に立つ」。

○山で朝食後に 30 日（日）朝刊を読む。北朝鮮からのミサイル飛来を吟ずる「飛翔体一人二役緊張の夏」（岸田外相兼防衛相）という句を思いついたが、家に戻って推敲し、「北の閃光緊張の夏」（線香・金鳥と懸ける）とした。七七なので信毎には向かない気がしたので、メールで朝日新聞に投稿。〔以上二つは 7 月 31 日（月）10:20 メモ〕

○メールを使い、昨日夕刻、朝日新聞に川柳投句。「革命はできるの？人はつくれるの？」（「人づくり革命」とかいう政策があるとか、ないとか。担当大臣がいるとか。まれに見る刺激的な日本語に興奮してしまう）、「国民を殺さないでね仕事人」（「仕事人」といえば「必殺仕事人」である。私見では「閣僚が仕事するのはあたりまえ」である。それならば、一般人も「呼吸人」とか「水飲み人」など、色々意味不明の言葉が作れる。安倍首相のブレインのキャッチフレーズ・センスは独自性に溢れており、特筆に値する。いつもにもまして暑い夏である。豊作を祈るばかりである）朝、篠ノ井駅ポスト。葉書で信毎にも別の川柳二句を投句。「A I が革命起こす赤い国」（香港系新聞が伝えた中国での出来事・良くできた小咄のようなエピソード）、「謝って済むなら選挙要りませぬ」（安倍改造内閣スタートの記者会見冒頭で首相が約8秒間頭を下げたあと陳謝）。〔8月4日（金）16:37メモ〕

○朝の通勤電車に乗ってすぐに、『立川談志まくらコレクション』（竹書房文庫）を読みはじめ、深く集中。篠ノ井の鉄橋を渡っている音で下車が近いことに気づく。こんなに深く集中することは珍しい。それだけ、この本に深い関心または共感があるのだろう。

〔8月7日（月）朝8:00メモ〕

○〔4日（2017年8月）の内閣改造から3日で、早くも閣僚の発言が問題になっている。問題の主は、初入閣の江崎鉄磨沖縄・北方担当大臣。就任会見では遅れて会見場に現れ、「知識がないから打合せに時間がかかってしまっ」と言い訳しつつ、メガネをかけて原稿を読み続けていた。その翌日は地元愛知県一宮市で、国会答弁について記者団に問われ、「しっかりお役所の原稿を読ませていただく。立ち往生より、しっかり朗読かな」と答えた。北方領土問題についても「素人は素人。白紙で臨む。皆さんのいろいろな知恵で色をつけてもらうことが大切だ」と述べた。さらに、「仕事人内閣」と呼ばれることについても「どの程度の方がしっかり仕事をするかですね」と、安倍首相の発言を否定するようなコメントを残していた〕以上、J-CASTニュース（<https://www.j-cast.com/tv/2017/08/07305239.html>）より。「馬鹿正直」と言う他に言葉なし。このことについて川柳を一句。「大臣は適材適所のはずなのに」（新居信正氏ふう「嗚呼無情」）。投

句はしない。〔8月7日（月）14:50メモ〕

○昨日、ジムでジョギングなどをしていたときに思いついて書き留めて置いたメモ。

①奇跡（宗教的に特別な意味を持つ言葉らしいが、ここでは深く考えないでおくものとする）はそれを願い、かつ準備をしている者に向かって雪崩のように起こる。

②技は技として精確に認識（または体得）された瞬間に技でなくなる。

③全自動山林管理システムの構想（「思い」「願い」はいつか実現されるかもしれない）。まずは理想のイメージを書いて（描いて）みるのが大事。苗は「田植機」を巨大化、強靱化した「木植え機」で植える。下草刈りは「自動掃除機」の「ルンバ」を巨大化したロボットにやってもらう。枝打ちもロボットにやってもらう。間伐や伐採と運搬はドローンで全自動化。林業成功の秘訣は安全とコストダウン。でも、実生でない木からいい材木はじつはできない。どうするか。思案のしどころだ。いいものをつくるためにはコストを惜しまない手間が必要なようだ。手間はいいものをつくるための必要条件。

④まずは理想のイメージを描いてみる。家庭ゴミの処理に「全自動ゴミ処理システム」を使える時代がいつか来るのではないか。ごちゃ混ぜのゴミをこのシステムに入れると「燃えるゴミ」「不燃ゴミ」「金属」等に自動的に分類される。

⑤首都と元首との関係は？ 8月7日（月）、ネットで調べてみたら特に日本については、微妙な問題があるようだ。国家とは何かを根源的に考える要になる「問い」の一つであることは間違いないようだ。〔以上の丸数字については8月7日（月）15:25メモ〕

○8月7日（月）16:30現在、48ページ分を入力済み。明日は台風襲来が予想される中、篠ノ井高校1年生11名と国会議事堂、外務省の見学。同窓会主催のバスツアー。久しぶりに「東京の風」に吹かれてみようと思うのだが、明日は風が強すぎて、まともに当たったら吹き飛ばされてしまうかも…。

○8月8日（火）5:30、信毎に7月に投句して没になったと思って九割がた忘れていた「きょう具合悪くて通院休みます」が掲載されたのを読む。選者・石田一郎氏による寸評がうれしい（コピー参照）。ついに三度目を達成した。安倍首相の暴走がなかったら、川柳にこれほど夢中になることはなかったと思う。「論敵は恩人」であるかもしれない。

今日は篠ノ井高校の国会周辺見学研修旅行。生徒10名と引率職員は学校長を含む4名。別動隊で同窓会長他数名。台風来週の中、バスで東京へ。行きのバスの中で『立川談志まくらコレクション』（竹書房文庫・2017年）のつづきを読む。独演会で嘶を聴いているかのごとくに面白い。長野県を出るまではトンネルの照明がチカチカして少し読みづらかったが、関東平野に下りてからは快調。缶コーヒーはあるし、少し疲れたら景色を眺めたりすればいいし、時々SAで休憩もとれたり、とても快適な読書環境。川柳「台風を弾いて逸らす山よろい」（台風が日本海方面へ進んだ）、「電話かけスマートフォンを

探す技」を思いつく。早速手帳にメモ。〔この川柳は8日（月）夜にハガキに書いて9日（水）朝に信濃毎日新聞社宛てに投函〕11:00に議員会館到着。国会議事堂と外務省を見学。「なるべくふざけたお土産を買ってくるように」と妻から頼まれていたので、議員会館地下で「晋ちゃんのびっ栗まんじゅう」,「タロカポネのかりんとう」を買う。いまや政治家も「消費」される時代。

他にふざけていないおみやげで国会議事堂マスキングテープ等を買う。自民党衆議院議員（長野一区）小松<sup>ゆたか</sup>裕氏のミニ講演と意見交換会。「所属政党は異なっても、政治家たちの願いは一つ。《世界の平和と安心・安全な生活》。政治にはスポーツマンシップが必要。ひとことで言うとスポーツマンシップとはリスペクトである。仲間・相手・ルールを尊重することが大事」と小松氏。

議員会館の後は国会議事堂見学、議事堂内の食堂で昼食。小松議員との別れ際に握手しながら、「スポーツのお話ありがとうございました。**独立した、依存心のない選手が、正々堂々とプレー**することが大切だと思います」と生徒たちにあまり聞こえないように気をつけつつ、小声で話しかけたら、小松議員「ウ～ン、そうですね～」と唸って共感を示してくれた。

その後、普段テレビで中継されている参議院本会議場、委員会会議室等を見学。国会議事堂自体がまるごと政治の博物館・同窓会館であるような気がする。風格があり、とても古風な建物である。

外務省へ移動し、記念撮影。外務省のホームページに篠ノ井高校生の訪問について掲載されるとのことだったが、9日（水）朝9:00現在発見できていない。15:35見学終了し、帰路につく。帰路で岩田校長と新入試制度（特に英語教育）の展望、SGHと篠ノ井高校、岩田校長の留学体験、川村<sup>きざん</sup>驥山の書、…等についてバスの中で雑談。有意義。

談志師の本を読み終わったので、中野<sup>たけし</sup>雄著『ストラディヴァリとグァルネリ』（文春新書・2017年）にとりかかる。少し読んだところで千曲川・坂城SAに到着。下車し19:15頃帰宅。

○9日（水）休日。朝刊で佐川国税庁長官が新任にあたっての記者会見を避けていることについての記事を読む。川柳「会見回避税の新設いかが」を思いつくが十七音になっているだけで句切れ？が悪い。推敲して「新設はいかがが会見回避税」としてみた。朝日川柳風の仕上がりになった（と思った）ので、メールで朝日新聞社宛てに投句。

○10日（木）、今日も休日。早朝4時頃、布団の中で川柳を思いつく。「会見をせずに済むなら納税も」（佐川新国税庁長官の記者会見回避について）。これはハガキには書かずに、変形した方がいいのではないか…。だんだん興が乗ってきたので、飛び起きて書斎スペースで推敲。変形して、信毎の三行コント「やまびこ」の原稿として考えてみる。

「スルーしたい／記者会見—新長官／納税—国民／（埴科郡・小太郎）」

ともかくハガキを書いて投函。帰りにコンビニでアイスコーヒー。〔8月10日（木）10:10メモ〕

○化学の問題を解いた後、県税の川柳を思いつく。「森林税要るか要らぬか藪の中」（「藪の中」は芥川龍之介の短編小説の一つ。「藪の中」の意味は、「関係者の言うことが食い違うなどして、真相がわからないこと」（週末に森林および藪の中で作業〔修行〕してきた経験がここに結実！）、早朝の句と並べてハガキに書いて投函することにした。投函完了。〔8月10日（木）12:00メモ〕

○朝、布団の中で思いついた川柳、「ランドセルもらって育ち与え去る」。十七音の中で起承転結。ちょっと重い内容なので投句はしない。〔8月11日（金）9:00メモ〕

○自問自答。なぜ川柳をつくるのか。世の中や身の回りで起きるいろいろな出来事について「要するにひとことで言うとどういうことなのか」を考えることに意義があると思っている。これは上田仮説サークルで学んだこと。さらに、そこに笑い（特に強い者への嗤い）や皮肉が加えられれば面白いと思う。要するに表現活動。なぜ応募するのか。広く社会に訴える機会が増えることは楽しいことだ。他者の評価を得ることで独善に陥るのを避けるというメリットも当然ある。「川柳は生きた証を残す技」。かつてのガリ本『授業記録は生きてる私』を思い出した。〔8月12日（土）12:10メモ〕

○なぜ読書メモを書くのか。今、自分の関心がどこにあるのかを確かめたい。そして、その時、何を考えたのかを記録に残しておきたい。〔8月12日（土）13:15メモ〕

○「誰にとっても今が人生で最後の瞬間」。じつは、前も似たようなことをメモしている。〔8月13日（日）夜、宴席で思いつく〕

○小松裕氏から返事のメールをいただく。川柳改訂「電話かけスマートフォンを探す技」→「電話かけスマホ鳴らして探し笑む」。起承転結ができた。佐久間象山は気に入った自作の漢詩を微妙に改訂しつつ、その都度、書としてしたためていたようだ。『象山全集』等。〔8月15日（火）17:30メモ〕

○昨日、竹内三郎さんにメールを出して、今朝、返信があることを知り、さっそく読む。サークル8月例会で紹介したくなる、素晴らしい内容。

○川柳を改訂「電話かけスマホ鳴らして探し笑む」→「電話かけスマホ鳴らして見つけ笑む」。はがきに書いてあったものを訂正して投函する。〔以上二件、8月16日（水）9:10メモ〕

○17日（木）、お盆休み最終日。終日、リビングの机をパソコンで独占。読書メモの執筆だけに時間が使える贅沢な一日であった。コーヒーを飲みながらゆったりと最高の気分で執筆できた。これから添付ファイルでこの原稿を学校に送り、明日の印刷製本に向

けて準備を進める。今日の成果約10ページ分で手応え十分。〔8月17日（木）21:20メモ〕

＊

最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。次回分の執筆に今日中に取りかかる予定。（終）〔2017年8月18日（木）脱稿〕